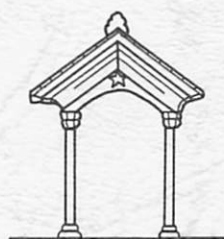


市立函館博物館  
研究紀要

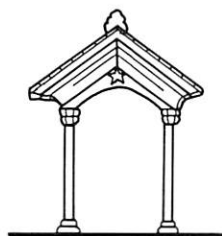
第 2 号



1992

市立函館博物館  
研究紀要

第 2 号



1 9 9 2

## 序

昨年、研究紀要の第1号を発刊いたしました。関係機関のご協力、ご支援をいただきながら、このたび第2号刊行の運びとなりました。

本誌では、民族学分野「馬場コレクション研究」を長谷部学芸員が、博物館学「時代に生きる博物館像」を根本編集員が執筆いたしました。各位のお役に立つことができれば幸いに存じます。

刊行までのこれらの調査・研究にあたりましては、多くの方々からのご協力とご助言を賜りましたことに、深く感謝申し上げますとともに、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、宜しくお願い申し上げます。

平成4年3月31日

市立函館博物館長

木村 繁

# 目 次

序

馬場コレクション研究

—市立函館博物館所蔵アイヌ民族資料いわゆる

「馬場コレクション」について— ..... 1

馬場脩略年表 ..... 15

写 真 図 版 ..... 22

時代に生きる博物館像

—市民本位の文化施設をめざして— ..... 25



## 馬場コレクション研究

— 函館博物館所蔵アイヌ民族資料いわゆる「馬場コレクション」について —

長谷部 一 弘

### <はじめに>

函館が生んだ北方考古学・民族学の権威馬場脩は、その業績のあかしとして千島・樺太・北海道における数多くの貴重な考古学上の発掘資料や北方民族資料をこの世に残した。これが世に言う「馬場コレクション」である。

馬場脩は、かつて函館が日本の中の北方の玄関口であった明治・大正・昭和の時代の中で千島・樺太・北海道をフィールドにして踏査し、独自の研究分野を確立していった。元来氏は、先史時代の遺跡に強い関心を持ち、函館中学時代の明治41年、函館考古会を結成するなどして考古学の分野でその才能を遺憾なく発揮していた。やがてこの若き土壤が、学術上北方圏における複雑な様相を示す考古学と民族学の中で、北海道を含む北方圏の諸民族における調査・研究において独自の基盤を築くに至り、氏の著した調査報告や収集資料を目にするとき、その根底に考古学的見地からの学術調査・研究という視点を読み取ることができる。

とりわけ民族学の分野では、アイヌ民族資料の学術的価値に反比例した資料の散逸を憂い、精力的に資料の収集にあたり、昭和5年の千島・エトロフ・シコタン島にはじまる資料の調査・収集活動は、樺太西海岸トウフツ・タランドマリ、東海岸タライカ・シスカ・ニイトイ・シラハマ・オッチホ地方や北海道、虻田・白老・鶴川・八雲地方等におよび、昭和16年まで行われた。

氏の収集した約2,000件を数えるアイヌ民族資料には、その膨大な数値とともに一つ一つの資料の学術的価値にその評価をくだすことができるが、その背景には氏が収集した資料にまつわる数多くのエピソードと資料に対する氏の限りない愛着がうかがえる。

その中で、今回これらの馬場コレクションのうち、国指定のアイヌ民族資料「アイヌの生活用具コレクション」に焦点をあて、論考を進めてゆきたい。

### <函館と馬場脩>

馬場脩は、明治25年2月23日、弁護士馬場民則の三男として函館区会所町52番地（現元町）に生まれる。公立弥生小学校を経て、明治39年4月、北海道庁立函館中学校に入学す

ると土器、石器の収集に興味を持ち始め、次第に考古学の世界に没頭していくことになる。多感な少年時代の学問的な時代的背景が氏自身に多大な影響を及ぼしてゆき、明治20年代日本考古学の祖を築いた坪井正五郎のコロポックル論もその一つであった。時は、まさに坪井正五郎のコロポックル論に端を発した世にいうコロポックル論争一色にあり、コロポックル果して原日本人か否かの真っ只中で馬場少年は、明治41年に函館中学有志と「函館考古会」を設立し、函館周辺の遺跡を調査するに至りその数20件を越え、現在日本考古学の標識遺跡とされている住吉町遺跡、サイベ沢遺跡もその中に含まれている。函館考古会は、明治44年発展的解消により新たに函館博物学会の発足をみている。

そして、市中の遺跡をフィールドにした考古学への関心を媒体として函館の歴史文化研究に傾向していく中で、アイヌ民族への学術的関心にも目覚め、1910年（明治43）夏、はじめて八雲地方・ユーラップを訪れることになる。それから26年の年月を経過した1936年（昭和11）同地を再訪することになるが、かつて見た集落・生活様式の余りの変貌にただただ耐え難い感を強く抱き、昭和初期よりアイヌ民族の所産が時代とともに消失していこうとするこのような北海道をはじめとする樺太、千島の各地の現実をまのあたりにした氏の「今にして集めておかねば、悔いを千載に残す」という資料収集の必要性を痛切に認識した収集活動をみるに至ったわけである。

また、明治の函館は、幕末安政6年頃からの西欧諸国との接触をきっかけに急速に西欧文明の影響を受け日常生活にまで及ぶこととなるが、キリスト教の布教活動も盛んに行われ、1892年（明治25）、アイヌの人々の教育機関としてアイヌ学校が開設されている。<sup>(1)</sup>

アイヌの人々に対する明治期の社会的世相は、非常に冷淡で函館市中を散歩するこのアイヌ学校の生徒に対する仕打ちも投石する者があつたりして相当のものであつたようであり、晩年氏自身少年時代の回想記の中で、同罪者の一人として非常に後悔していたことが記されている。<sup>(2)</sup>

1979年（昭和54）9月、北方考古学・民族学研究に一生を捧げ87年の生涯を閉じた馬場脩は、生まれ育ったゆかりの函館を安住の地とし、はるか下北半島を望む立待岬に向かう高台にある住吉町の共同墓地に安らかに眠っている。

### <馬場コレクションに関わる諸動向とその背景>

昭和5年、馬場脩は、北海道から東京への帰路、函館に立ち寄っている。虻田地方より収集したアイヌ民族資料を抱え、函館図書館に立ち寄ったのである。市立函館図書館には当時岡田健蔵がおり、氏が収集してきた資料を実見している。この中で、岡田は5枚の衣服つまりルウンペに注目し、東京に持ち帰らないでどうしても函館図書館に寄贈して欲し

いことを熱望したのである。<sup>(3)</sup> この熱意は、馬場に伝わりその後けっして津軽海峡を渡ることはなく、アイヌ民族資料の逸品として昭和23年市立函館博物館に移管されるまで函館図書館陳列資料として保管された。

第二次世界大戦が大詰めを迎える昭和20年3月、東京は大空襲に見舞われ、東京本郷に住まいをかまえる馬場宅もまたその火中に巻き込まれ、北海道、樺太、千島において収集した膨大な民族資料約2,000点のうち、その大半を焼失してしまい750点余りが残存するだけとなった。<sup>(4)</sup> 氏が収集した50枚を数えた衣服もすべて灰と化し、くしくも函館に足を留めた5枚の衣服こそ「焼け残った5枚の着物」であった。

戦後まもない昭和22年イギリスの大英博物館は、馬場に対しコレクションの購入を申し入れてきている。その後昭和30年氏は、大英博物館より再度コレクション購入の申し入れを受けている。<sup>(5)</sup> この頃、氏はイギリス王立人類学会「MAN」の特別会員に推薦されている。

昭和25年、当時アメリカ・ミシガン大学人類学科在籍中であったアメリカにある数少ないアイヌコレクションの一つに数えられるノーベックコレクションで知られるエドワード・ノーベックは、馬場資料のうち特に千島アイヌ関係資料の購入を打診したが、結局購入資金のメドが立たず断念している。<sup>(6)</sup>

昭和34年5月6日、昭和20年3月の東京大空襲で難を逃れた758点のアイヌ民族資料は、国の重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定されている。<sup>(7)</sup> 現在でも日本各地に散在しているアイヌ民族資料の中でも唯一の指定文化財である。

昭和40年、「アイヌの生活用具コレクション」のうち8点が、虫喰い損傷等のため滅失毀損を生じる。現存する残りのコレクションにおいても資料の滅失毀損の凄まじさを物語る資料が少なからず認めることができ、当時の資料に対する防虫対策等がかならずしも万全ではなかったことを示している。この資料滅失毀損の発生により、文化庁は馬場宅を訪れ、コレクションの資料対策・防虫対策を講じている。<sup>(8)</sup>

昭和44年4月、市立函館博物館は、氏より「アイヌの生活用具コレクション」のうち43点を借用し、特別展「北方民族展」を開催している。このことは、コレクションの一部とはいえ、久しく望まれていた馬場コレクションの初公開であった。その翌々年の昭和46年4月、国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」全容の本邦初公開と銘打って、748点を借用し、市立函館博物館特別展「カラフトアイヌ展」を盛大に開催した。この二度にわたる展覧会を契機として函館市は、市立函館博物館のアイヌ民族資料の収蔵・展示充実のため、昭和46年11月、馬場所有の国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コ

レクション」748点を購入するに至ったのである。

このようないわゆる馬場コレクションに関わる国内外の事情は、無論コレクション自身の逸品的資料価値を十二分に周知されていたことを物語っているが、昭和20年代よりすでにアイヌ民族学研究の実践とともに、物質文化研究の好資料として注目されていた事も事実である。しかし、反面アイヌ民族学における物質文化研究の模索と民具資料の活用方法の学術的共通認識の欠如の中で、わが国における資料の海外流出および散逸の非常なまでの危機感が、追隨するアイヌ民族学研究の必要性の実感とその確立の急務を物語っていた。その意味でこの状況の中に置かれた存在の一つに馬場コレクションがあり、このような状況を察知させ、急務に應えるべく馬場コレクションであったといえる。また、昭和34年の重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」の指定は、アイヌ民族資料に関わる国際状況に対応すべく文化財行政におけるアイヌ民族資料の保護、保存という意味できわめて重要な意義を有した文化財保護対策であったといえよう。

#### ＜資料収集の目的と時代的背景＞

昭和46年4月20日から5月30日の約1か月間にわたり、カラフトアイヌ展が市立函館博物館において開催されている。国指定重要民俗資料馬場コレクションの初公開である。公開にあたり、氏は、これまでのアイヌ民族資料の収集までのいきさつを「私とアイヌ土俗品」と題して寄稿している。<sup>(9)</sup> その中で氏は、少年時代を過ごした明治30年代の函館時代から昭和10年代にかけてアイヌ民族の社会的境遇の悲惨さに起因した急速な生活様式の変容とそれに伴う精神文化、物質文化の二面を有する伝統的文化形態の崩壊に直面していた現状をとらえ、考古学で養った学術的見識の中で資料収集の必要性とその意義を述べている。

氏の北海道における資料収集は、胆振・日高地方を中心にして昭和5年4月から昭和13年10月まで行われている。昭和5年の有珠、虻田での5枚のルウンペの収集に際して、氏に譲ったアイヌ婦人は、次のように語ったという。<sup>(10)</sup> 「私は貧乏して金がないので、お母さんの残してくれた着物を、このだんなに売りました。お母さん許して下さい。しかし、このだんなはよさそうな人だから、この着物を、きっと大事にしてくれるでしょう」と5枚のルウンペとの惜別の念を込めて語りかけている。このことは、氏自身それ以後の収集活動の精神的支えとして終生心から離れることがなかった出来事であったようである。また、昭和11年の秋、鶴川のチン集落を訪れ、「いまどき、こんなものを持っていても、なんの役にもたたないので、全部手放そうと思っている」といって多くの民具を譲ってもらっている。同じ頃白老を訪れ、十数本のキテを収集している。「私はもうシャモになったので、

アイヌの道具は裏の物置にしまっているから持っていけ」譲ってくれたアイヌの言葉であった。

樺太における資料収集は、昭和10年から昭和16年まで5回におよんで渡航し、西海岸のタランドマリ、トウフツ、東海岸のオッチホ、シラハマ、タライカ、ニイトイの各集落に及んでいる。当時の樺太アイヌの生活様式もほとんどその伝統的文化形態を留めず、若年層への伝統的文化伝承も皆無に等しかったようで「青年たちは、旧来の風習になじまず、むしろこれをきらう傾向が強く、老父が祖先からの民俗品を私たちに見せるときも、そばで、これを冷笑するという風景がしばしば見られた。老人たちの中には、こんな若者の態度に祖先からの宝物を伝えることを、はなはだ不安に感じて、ひそかに付近の山中に隠した者も多いということだった。」<sup>11)</sup> 皮肉にもこのような樺太アイヌ社会の現状が、膨大な数にのぼる資料収集を容易に可能にしたのである。樺太でもまた氏は、生計の貧困に勝てず家宝としている生活用具をやむなく手放す機会に幾度か遭遇している。

このように、氏の収集した資料が、アイヌ民族を取り巻くめまぐるしい社会状況と生活環境の変化の中でわずかな生活文化伝承にいちろの望みを残しながらどうしようもない新たな生活環境への必然的順応の遺産として存在していたことが、氏を一層強く収集活動にかりたてたものといえる。

### <昭和初期の樺太・千島事情>

馬場脩は、昭和10年から昭和16年にかけて樺太西海岸トウフツ、タランドマリ、東海岸オッチホ、シラハマ、タライカ、ニイトイの各集落において資料収集にあたっている。1905年（明治38）、樺太本島北緯50°以南の領土が日本領土として復帰すると、各地に在住していた樺太アイヌは、保護政策の名のもとに大正元年から3か年にわたってトウフツ（登富津）、タランドマリ（多蘭泊）、オッチホ（落帆）、シラハマ（白浜）、タライカ（多来加）、ニイトイ（新間）、カシホ（檜保）、チライ（智来）、コモシロ（小茂白）の9ヶ所に移住し、その保護下に置かれた。そのうち氏が昭和10年から16年まで訪れた集落は、トウフツ（登富津）、タランドマリ（多蘭泊）、オッチホ（落帆）、シラハマ（白浜）、タライカ（多来加）、ニイトイ（新間）の6か所であり、氏が訪れた昭和14年当時の樺太アイヌの総人口は、戸数274戸、人口1,263人を数え、そのうちトウフツ（登富津）102人、タランドマリ（多蘭泊）373人、オッチホ（落帆）99人、シラハマ（白浜）34人、タライカ（多来加）11人、ニイトイ（新間）120人であった。<sup>11)</sup> 氏が訪れた各集落では、すでに樺太アイヌ固有の家屋等の建造物はなく、僅かに建っている倉を残すのみで、樺太庁から指定された新たな住居が建っていた。しかし、和人との接触が次第に多くなっていく中でも、樺太アイヌの伝

統的な狩猟、植物採集の生業は、細々ながら久しく行われていた。このため樺太庁では、保護政策の一貫として漁撈技術の向上のための指導員の配置や漁船、漁具の貸与事業を行っていた。また、不漁時対策として農耕を奨励し、土地、農具、種子の供与も行っていた。

また、氏の樺太における資料収集活動期にあたる昭和初期の樺太アイヌの動向として、昭和4年から6年にかけて各集落の概観をみると、<sup>12)</sup> 樺太西海岸トウフツ（登富津）は、戸数19戸、人口91人、漁業を主とし農業を副としていた。

タランドマリ（多蘭泊）は、戸数97戸、人口352人、農業、漁業、商業、交通業等に従事しており、大正4、5年まで毎年アシカ猟のため海馬島へ出猟していたところである。氏が、樺太を訪れた最初の地でもある。

オッチホ（落帆）は、大正元年から3年にかけて愛郎、負咲、富内の三集落の住民を集め落帆集落を形成し、その半数が北海道アイヌであった。戸数27戸、人口140人（内訳、樺太アイヌ13戸62人、北海道アイヌ14戸78人）で、半農半漁の生業を営んでいた。シラハマ（白浜）は、大正10年7月、大谷、魯礼、内湖、志安、相浜、真苫、小田寒、北板田、東白浦、真縫の十集落の住民を集め、白浜集落を形成し、<sup>13)</sup> 戸数82戸、人口301人、漁業を主とし農業を副としていた。昭和8年の火災のため、その後一部が富浜に移っている。シラハマは、当時観光客が多く出入りしていたところでもあった。

タライカ（多来加）は、シスカ（敷香）集落に属していた。シスカ集落は、アイヌ、オロッコ、キーリン、サンダー、ニクブン、ヤクーツの6民族を有し、うちアイヌ民族は、戸数18戸、人口80人を数える。露領時代まで3軒の戸数があったところである。鯨、鰈の良漁港として知られていた。氏が昭和12年第一回日本民族学会北方文化調査団の一員として訪れた東タライカでは、無数の竪穴式住居を確認している。また、明治38年の流行性感冒のため、大部分の樺太アイヌが死亡したところでもある。

ニトイ（新間）は、東海岸でも大規模な集落を形成し、戸数34戸、人口122人を数える。樺太庁は、この地にタライカ、ナイロ（内路）、カシホ（樫保）の住民を移住させている。氏が訪れた頃は、森モヤンケという村長格の人物がおり、道路の両側に家屋が建ち並んで150人が住んでいた。中には、北見出身のアイヌの人々もいた。

このように、氏が訪れた昭和初期の樺太事情は、樺太アイヌにみる限り樺太庁の保護下におかれ、かつての住み慣れた生業、生活の地を離れ、一定の集落体に踏襲された形で存在していたことがわかる。そして新たに形成されたコタンの誕生が、本来樺太各地にコタンを形成し、独自の地域的特性を強く有していた伝統的文化形態を大きく変えていったこ



とは言うまでもない。かかる村から村への人の移動は、単に人的移動に留まらず、それに伴う文化形態の移動とともに、その地域に即した新たな文化形態の形成が、必然的に生じていったわけである。そういう意味では、氏の収集した樺太アイヌ資料は、一概にその地域に根ざした伝統的文化遺産として率直に把握できる資料としては解釈できがたいのかもしれない。人々にとって、生活用具は先祖伝来の家宝として受け継がれたものと新たな生業、生活のために新しく製作されたものがあり、いかなる状況にあれ人の移動が、地域における本来の伝統的生活様式を示す民族資料の判断基準を複雑にしていたことは確かである。

馬場脩が、エトロフ（択捉）島シャナ（紗那）、ルベツ（留別）上陸の帰路、南千島色丹島を訪れたのは、昭和5年8月のことである。<sup>14</sup> ハリストス正教会の敬虔なキリスト教信者でもあった氏は、色丹島のシャコタン（斜古丹）にハリストス正教会を尋ねている。色丹島の住民は、明治8年樺太・千島交換条約締結によって日本に帰属し、明治17年7月11日北千島シムシユ（占守）島から移住してきたクリルアイヌつまり千島アイヌで、明治17年にはすでに色丹島の全員がキリスト教信者となっていた。

当時の色丹島における千島アイヌの人口は、20戸97人を数え、はるか北千島より保護政策のもとに南千島に強制移住という形で色丹島定住を余儀なくされた。急速な生活風土の変化により、年々病死者を出すに至り人口減少の一途をたどり、昭和初期には40数名を数えるばかりとなっていた。<sup>15</sup> ちなみに、氏の訪れた昭和5年の色丹島の総人口をみると、和人が大半を占める169戸911人であった。<sup>16</sup>

根室県令による明治17年からの移住に伴う撫育費支給等の保護政策は、当初十か年をもって自立生活の道を歩ませようとしたが、その目的を達成することが出来ないまま、昭和6年廃止されるまで続いた。言うまでもなく、氏が色丹島を訪れたのはそのような状況下にあった時期でもあった。移住当初の生活環境の変化に伴う北千島の伝統的狩猟、漁撈を主とした生業形態から強制的な漁業、牧牛、豚、羊、鶏の家畜飼育、農耕の奨励など一変した生業形態への変化は、伝統的な生業形態を維持できない程の色丹島の自然環境の不適正と相まって、千島アイヌとしての存在を益々せばめていくことになり、昭和初期の千島アイヌの最大の生業は、夏季における海草の採集活動程度であった。

このように、北千島シムシユ（占守）島から南千島色丹島への強制移住は、結局千島アイヌの伝統的生活形態を根底から覆し、民族そのものの存在をまたたくまに短縮させる結果となった。氏は、色丹島のハリストス正教会に集まった5、6人の信者を前にして、これらの現状を如何なる心境でかいまみた事だろうか。

## ＜資料紹介＞

現存する馬場コレクションのアイヌ民族資料「アイヌの生活用具コレクション」は、総数750件を数える。(但し、国指定資料ほか未指定寄贈資料衣服5枚を含んで以下、総数755件として紹介する。)これは、市立函館博物館所蔵アイヌ民族資料1,806件<sup>(17)</sup>の42%を占める数にあたる。

馬場コレクションの資料数は、大別すると信仰・儀礼用具412件、狩猟・漁撈用具129件、調整・加工用具55件、炊事・調理用具40件、調度用具6件、収納具11件、運搬具7件、楽器5件、喫煙・発火具36件、服飾具49件、その他の資料5件のバリエーションに富んだ内容で把握できる。また、地域別に資料数をみても、各北海道256件、樺太479件、千島6件、収集地不明14件である。その中で、最も多く収集された地域をみても、樺太では、西海岸タランドマリ241件、トウフツ68件、東海岸タライカ90件、北海道では、胆振鶴川地方86件、日高地方61件である。

このように資料内容は、全資料の相当数を占める信仰・儀礼用具、狩猟・漁撈用具とまとまった喫煙・発火具がコレクションの核をなし、数量的に最も多い樺太アイヌ資料が479件を数え、道内の主な博物館施設に収蔵されている樺太アイヌ資料総数約450点<sup>(18)</sup>と比較してもその多くを有していることがわかる。以下に当コレクションの特色を示す代表的な資料を若干紹介したい。

信仰・儀礼用具は、捧酒籠の320件が群を抜き、その内訳は、樺太アイヌ関係232件、北海道アイヌ関係75件、収集地不明13件である。中でも樺太アイヌの捧酒籠は、樺太アイヌのまとまった信仰・儀礼用具の代表的資料で知られている。別掲として、北海道アイヌおよび樺太アイヌの捧酒籠の分類を表記する。

狩猟・漁撈用具では、弓・矢、銚、アマッポ仕掛け矢・銚が相当数を占め、樺太沿岸の海獣猟用のレッカ・スフと呼ばれる鉄銚は、樺太西海岸のアザラシ猟や海馬島におけるアシカ猟時に使用されたものである。また、熊狩り用の槍は、いわゆる山丹槍で山丹交易を物語るものとして興味深いものである。

喫煙具は、コレクションの代表的資料の一つにあげられ、石製の雁首を有するシュマ・キセリ、牙製象嵌仕立ての煙草入れ、皮製火打ち入れは、樺太アイヌの嗜好儀礼を裏付ける好資料である。氏は、樺太タランドマリで樺太アイヌの儀礼として貴重な喫煙事例をも収集している。色丹島で収集されたパイブもまた、カムチャツカ半島の諸民族との交流を知る数少ない資料で、千島アイヌにおける巻煙草の普及を物語るものである。<sup>(19)</sup>

調整・加工用具では、婦人の炊事用エビリケ、木の裁断や食事用ナイフとして用いるイ



ナサクマキリ等の小刀が多い。また、鉄砲玉の鑄造具は、樺太アイヌにおける狩猟用具の変遷をたどるうえで貴重な資料として注目される。木、皮等の被加工物に孔を穿つ錐もまた現存する樺太アイヌ資料としては、国内唯一のものである。類似資料として、サハリン州ユジノサハリンスクやヨーロッパの博物館収蔵資料にも認められるものである。<sup>20)</sup>

炊事・調理用具のうちカジキ料理用の包丁は、かつての白老地方におけるカジキ漁を裏付けるもので数少ない調理用具の一つである。

収納具は、色丹島収集のムリッチがあげられる。ムリッチは、テンキ草を編んで製作された物入れであるが、北千島シュムシュ島、ホロムシル島の千島アイヌに伝統的工芸品として受け継がれたもので、明治17年の強制移住により南千島色丹島にもたらされたものである。

服飾具は、唯一重要有形民俗文化財未指定の北海道南西部虻田地方で収集された5枚の衣服ルウンペを除いては語れない。戦前約2,000点に及ぶ収集資料が東京大空襲により大半が灰と化し、その中に氏が収集した約50枚の衣服が含まれていた。この悲惨な資料の焼失をよそに、運良く焼け残った5枚のルウンペは、昭和23年市立函館博物館発足に伴い、市立函館図書館より引き継がれ、北海道アイヌの着物として旧函館県博物館二号先住民民族館に展示された。そして染色家芹沢銈介、東京国立博物館染色室長山辺知行、北海道大学教授児玉作左衛門らの服飾・染色研究家が来館の際、絶賛した資料であるという。<sup>21)</sup> 今となっては、氏が収集した唯一の衣服となってしまったわけである。また珍資料としてあげるとすれば、胆振鶴川地方のチンで収集した儀礼用のシドキ付きの首飾りがある。首飾りは、ガラス玉によって製作されたものが一般的であるが、当資料はガラス玉に算盤玉と箱館通宝<sup>22)</sup>の組み合わせによって出来ているもので他に例をみない。

コレクションの代表的資料をみてきたが、そこに資料の地域的特性と種々にわたる特異な文化形態の一要素を知ることができる。特に、樺太西海岸、東海岸を中心に収集された資料は、わが国における樺太アイヌの数少ない資料にあって、樺太アイヌの物質文化の断面を探るうえで最もまとまった資料データといえる。今後これら個々の資料は、アイヌ民族の物質文化の本質と変遷をたどるための基礎データとして一層認識され、かつ活用されるものである。

尚、コレクションを形成しているその他のバリエーションに富んだ資料の内容一覧は、国指定「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書に詳しい。<sup>23)</sup>

### <コレクションの意義と評価>

馬場脩の収集資料のうち、樺太、千島、北海道で収集したアイヌ民族資料は、昭和34年

5月6日、国の重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」に指定された。<sup>24</sup>北海道はもとより樺太、千島の各地において、急速な社会状況と生活環境の変化が加速していった1930年代のこれらの資料収集は、これまで、そこで生活を営んできたアイヌ民族のわずかに残る伝統的文化形態とわずかな伝統的文化形態の記憶をたどることができる最も活きた民族資料として調査・研究、展示等に供されてきた。

前述のとおり馬場コレクションにまつわる内外の動向は、確かに資料的価値評価の現れとして理解できるものであるが、その反面、資料の海外流出・散逸という可能性を十分含んでいるものであった。

第二次世界大戦前後、アイヌ民族学研究の必要性が叫ばれる中、馬場コレクションは、わが国における物質文化の学術研究の上で、不可欠要素を有する好資料として周知され、その公開を久しく囑望されていた。アイヌ民族学における物質文化研究そのものが、「ひと」と「もの」との相関関係を基礎データである具体的資料に基づくバックデータの集積、分析とその機能的、形態的分類によって体系づけられるうえで、資料の海外流出・散逸という危惧は、社会的背景とあいまって遅過ぎる本質的なアイヌ文化の解明を程遠いものにしてしまい、さらにその目的を一層困難にしていくことを意味するものといえる。その意味で、わが国初のアイヌ民族資料の国指定重要文化財であることもさることながら、氏のアイヌ民族資料に対する考え方と文化財行政的確な判断が現在の馬場コレクションの存在を生み出している意義は大きい。

また、戦前十数年にわたり氏の収集した約2,000点にのぼる膨大な民族資料が昭和20年の東京大空襲によって大部分を焼失してしまい、もはやその全資料の内容と実態をつぶさに把握できえない現状は、かろうじて焼け残った758点の資料的価値を一層増大していることは言うまでもない。くしくも同じ東京大空襲において、当時馬場コレクションと並んでアイヌ民族資料の逸品と称された原始工芸文化史の第1人者であった杉山寿栄男の収集した膨大な資料もほとんど灰と化している。<sup>25</sup>

資料的価値評価に及べば、収集資料の相当数がわが国を代表する樺太アイヌ資料となっていると共に、何と云っても資料一つ一つの出所が明確であることが最大の特徴といえよう。出所等の資料に関する由来が不明確なアイヌ民族資料が相当数を占めているわが国の資料事情にあつて、このことは、氏の収集活動の足跡を知ることができる根拠となるとともに、資料分類と他の博物館施設等の収蔵資料の同定作業の基礎資料に十分なり得るものである。また、樺太タランドマリ等での資料収集時における民俗事例の聞き取り調査も一層これらの資料的価値を高めている。収集時における氏の眼の確かさと見識の深さを感じ

させる。

しかしながら、厳密に「造り手」と「使い手」の存在があつてはじめてそこに「もの」が存在する物質文化の本質を考えた場合、バリエーションに富んだ多くの生活用具コレクションだけに、収集当時の現状を推察すれば日常の生活用具として使用されていたものよりも、もはや過去の遺産として残存していた資料が多くを占めていた現状の中で、果して物質文化の体系的な資料収集のあり方をどれ程意識していたか気になることも事実である。今後の資料分析によってその意図と真意をつかむことができれば、物質文化研究上コレクションの意義をふまえた資料活用方法が一層具体的になってゆくものといえる。

膨大な数にのぼる氏の収集資料について、佐々木利和氏は次のようなコメントを残している。<sup>26</sup>「この750点のアイヌの人びとの遺物は、往時の馬場コレクションからすれば、三分の一程度であるという。その蒐集の規模の大きさに驚かされるが、反面、個人がそこまで蒐める必要があつたのかという疑問もまた残る。・・・」この点に関して、氏の資料収集活動に至る回顧録の中で、「滅びゆくアイヌ人の土俗品を、今にして集めておかねば、悔を千載に残すことに気がついて集めだしたのは昭和の初期頃からであつた。」と記している。<sup>27</sup>氏の各地での見聞実態に基づくアイヌ民族の社会的状況の把握が資料の収集活動そのものを一つの責務として自覚させ、もはや伝統的生活様式の継承が不可能な状況の中、せめて一つでも多くの資料を後世に文化遺産として残してやらねばという心情が今日の本質的なアイヌ文化の究明に大きく寄与している結果を生んだものといえる。当時、どれ程の研究者たちが、アイヌ民族を取り巻く現状を直視し、察知したことであろうか。大英博物館をはじめとする、たび重なる資料購入の誘いに乗ずることなく、不滅のアイヌ民族資料としてわが国に留まらせたこともまた、一貫した氏の信念に基づくものと評価できよう。

### <結びにかえて>

昭和46年、馬場コレクションの名で広く周知されていたアイヌ民族資料が、市立函館博物館の新たな民族資料として迎えられた。それは、北方民族資料の宝庫として知られていた函館博物館を結果的に日本を代表する北方民族資料の殿堂に押し上げたことでもあつた。

それから、博物館担当学芸員の世代交替の中、函館博物館の核をなす一大資料として広く調査・研究、展示等に供されて十数年の歳月が流れ、平成元年11月、函館市北方民族資料館に収蔵、展示される運びとなつた。氏の生前のコレクション収蔵、展示に対する北方民族資料館建設の願望がここに来てようやく成就されたわけである。

周知のとおり、馬場コレクションの名は、あまりにも有名になり、その名声とともに訪

れる人の関心を一層強いものにさせていったが、馬場コレクションが函館博物館に収蔵されてからちょうど20年たった今、その節目として改めて「馬場コレクションとは何ぞや」とふと考えてみた時、馬場コレクションに関わる全容について誰もそして一度も論じられていなかった事実に気が付いたわけである。これ程のコレクションであるがゆえの事から、今更ながら語るに及ばない資料であったからかもしれないが、今後のコレクション研究にとってその在り方と活用を考えた場合、どうしてもやっておかねばならない作業の一つであると考えたわけである。

各項において、馬場コレクションに関わる全容からできるだけ氏の残した数多くのコレクションの本質を引き出すことに努めたが、資料の収集を裏付ける肝心なフィールドノート等のバックデータの確認が思うようにできなかったことは、大きなマイナス要因として認めざるを得ない。樺太、千島、北海道の広範囲を踏査し、質量ともに比類のないコレクションを残存させた業績の裏打ちとして必ずやそのバックデータが存在していることを切に期待し、今後の継続的な調査・研究において究明してゆきたい。

質量ともに秀でたコレクションの特性に比例して一度には到底語り得ない性格のものであることは重々承知しているが、この馬場コレクションの紹介が、馬場コレクション研究の第一歩として、少しでも今後のアイヌ民族学における物質文化の調査・研究の目安となるものであれば幸いである。

論考を終えるにあたり、資料提供等に際しご協力いただいた関係諸氏に心から感謝したい。(尚、本文は、平成3年度北海道教育委員会主催アイヌ民俗文化財専門職員等研修会講義発表「函館博物館所蔵資料いわゆる馬場コレクションについて」をベースに加筆、論考したものである。)

(函館市北方民族資料・石川啄木資料館学芸員)

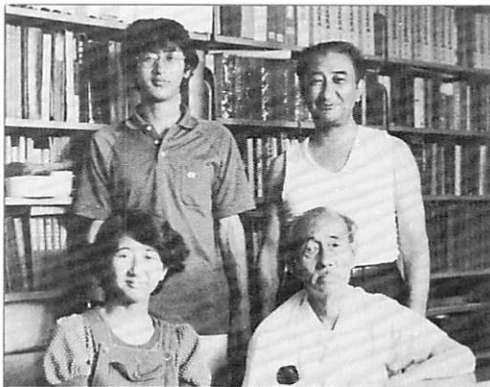
〔注〕

- (1) 辻喜久子 もう一つの学校教育“慈善教育”アイヌ学校 函館市史 通説第二巻 第10章  
学校教育の発生と展開 第二節近代学校教育確立への模索 函館市史編さん室 1990
- (2) 馬場脩 私とアイヌ土俗品 馬場コレクション カラフト・アイヌ展目録 市立函館博物館  
1971
- (3) 姫野英夫 焼け残った5枚の着物 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」  
整理報告書第4編 アイヌの服飾品 市立函館博物館 1978
- (4) 馬場脩 アイヌの宝物 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告  
書第5編 アイヌの狩猟用具・その他 市立函館博物館 1979
- (5) 馬場脩談による。
- (6) 小谷凱宣 北米のアイヌ資料に関する古記録類—在米アイヌ関係資料の民族学的研究（経過  
報告1）—名古屋大学教養部「日本学特定研究」報告 日本社会の構造と異文化変容システ  
ム 1991 一部小谷凱宣氏口述教示による。
- (7) 指定書内容は、衣食住関係 199点、生産関係 174点、運搬関係 9点、信仰関係 367点、楽器  
9点である。
- (8) 馬場脩談による。
- (9) 馬場脩 私とアイヌ土俗品 馬場コレクション カラフト・アイヌ展目録 市立函館博物館  
1971
- (10) 馬場脩 北方民族の旅 毎日新聞 1974
- (11) 西鶴定嘉 樺太アイヌ 樺太文化振興會 1942 みやま書房 復刻版 1974
- (12) 樺太庁 樺太土人調査書 1931 河野本道選 アイヌ史資料集 第六巻 樺太編 1980  
千徳太郎治 樺太アイヌ叢話 全 市光堂 1929 河野本道選 アイヌ史資料集 第六巻  
樺太編 1980  
知里真志保 山本裕弘 アイヌ生活の四季 樺太自然民族の生活 相模書房 1979
- (13) 大正10年、シラハマ集落への樺太アイヌの移住について月日および前居住地の所在が記録に  
よって若干異なっている。ここでは、樺太庁 樺太土人調査書に基づいて記載する。（千徳  
太郎治 樺太アイヌ叢話では、大正10年8月、大谷、落合、露礼、内淵、相浜、小田寒、白  
浦、真縫、函田、柴浜の10か所から移住と記されている。）
- (14) 馬場脩 北方民族の旅 毎日新聞 1974  
北方民族の旅 北海道出版企画センター 1979
- (15) 林欽吾 色丹島のアイヌ族 大野笑三編 南千島色丹島誌 アチックミュージアム彙報  
第47 アチックミュージアム 1940
- (16) 田中薫 大野笑三 色丹島概説 大野笑三編 南千島色丹島誌 アチックミュージアム彙報  
第47 アチックミュージアム 1940
- (17) 市立函館博物館蔵品目録 — 1 — 民族資料篇 市立函館博物館 1979

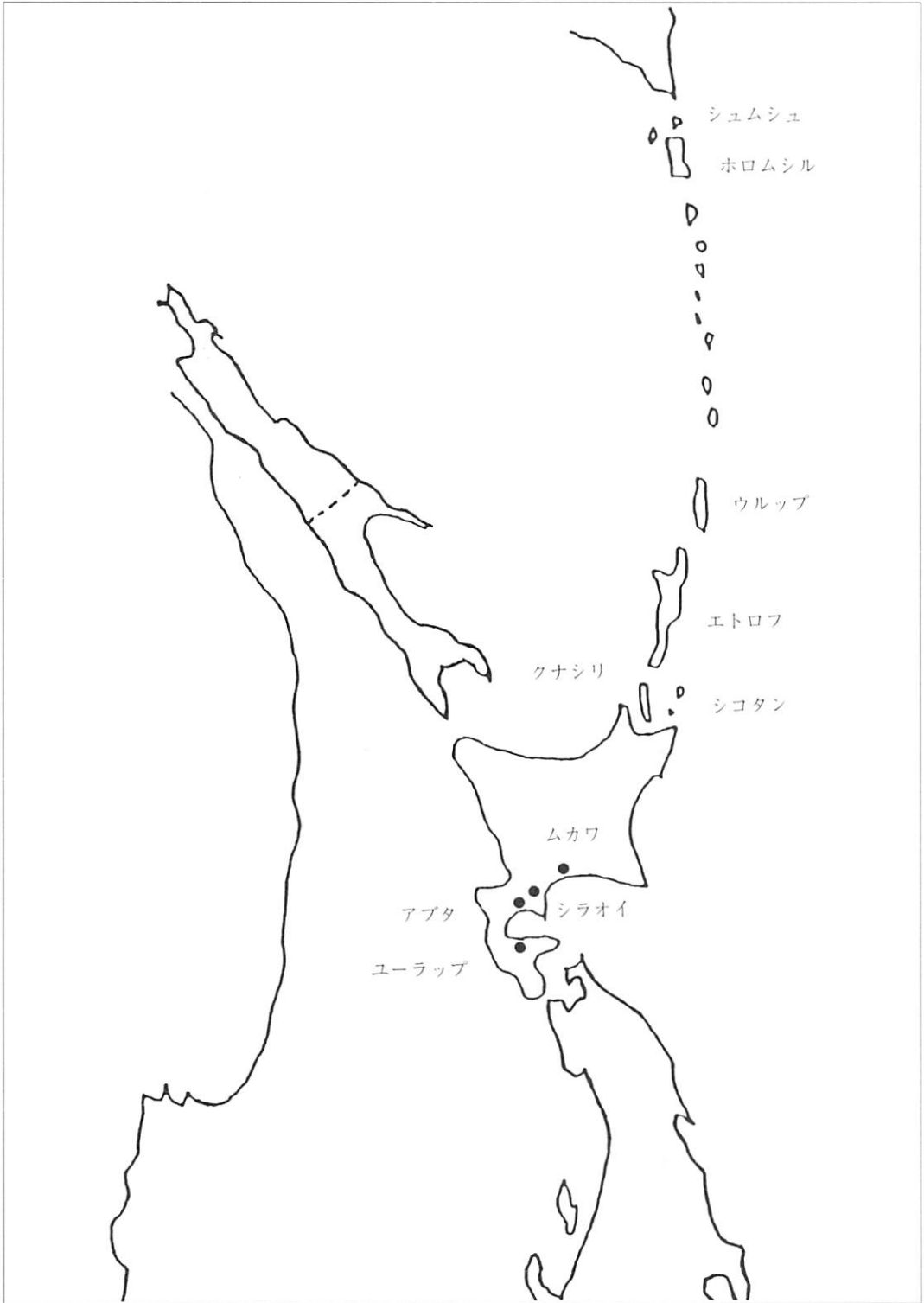
- (18) アイヌ史 資料編2 民具等資料所蔵目録(1) 社団法人北海道ウタリ協会 1988  
 樺太アイヌ資料は、市立旭川郷土博物館150点、網走市立郷土博物館133点、北海道開拓記念館169点が確認される。
- (19) 馬場脩 姫野英夫 アイヌの喫煙用具 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第3編 アイヌの喫煙用具 市立函館博物館 1977
- (20) 西ドイツ学術振興会、トヨタ財団の助成による「中部ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクション調査」でボン大学日本文化研究所ヨーゼフ・クライナーらにより確認されている。  
 ヨーゼフ・クライナー ヨーロッパにおけるアイヌ関係コレクションの歴史と現状 国立民族学博物館研究報告別冊 5号 国立民族学博物館 1987
- (21) 姫野英夫 焼け残った5枚の着物 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第4編 アイヌの服飾品 市立函館博物館 1978
- (22) 安政4年(1857)箱館奉行は、不正な流通経済是正のため箱館谷地頭に銭座を設け、鉄銭「箱館通宝」を铸造した。
- (23) 国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第1篇 カラフトアイヌのひげべら 市立函館博物館 1974  
 国指定重要民俗資料「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第2篇 北海道アイヌのひげべら 市立函館博物館 1976  
 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第3編 アイヌの喫煙用具 市立函館博物館 1977  
 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第4編 アイヌの服飾品 市立函館博物館 1978  
 国指定重要民俗文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第5編 アイヌの狩猟用具・その他 市立函館博物館 1979
- (24) 重要民俗文化財の名称は、昭和50年9月30日の改正により、重要有形民俗文化財に改められた。
- (25) 金田一京助 杉山壽榮男 アイヌ芸術 1巻 服飾編 1941  
 金田一京助 杉山壽榮男 アイヌ芸術 2巻 木工編 1942  
 金田一京助 杉山壽榮男 アイヌ芸術 3巻 金工・漆器編 1943などにコレクションの内容が紹介されている。馬場コレクションのうち多蘭泊収集の小刀、色丹島収集の煙草入れが掲載されている。  
 杉山壽榮男の足跡・業績は、ふじもとひでを「アイヌ研究史」みやま書房 1968等に詳しい。
- (26) 佐々木利和 書評 市立函館博物館『重要文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書』民族学研究 45巻2号 日本民族学会 1980
- (27) 馬場脩 私とアイヌ土俗品 馬場コレクション カラフト・アイヌ展目録 市立函館博物館 1971

## 馬場 脩 略年表

西暦	年号	
1892年	(明治25)	函館区会所町五十二番地に生まれる
1910年	(明治43)	八雲、ユーラップを調査
1912年	(明治45)	北海道庁立函館中学校卒業
1917年	(大正6)	日本歯科医科大学で学ぶ
1923年	(大正12)	アメリカ合衆国ミズリー州 ウェスタン・デンタル・カレッジ留学、博士号取得
1930年	(昭和5)	千島、エトロフ、シャナ・ルベツ、シコタン島、シャコタンを調査 胆振、有珠・虻田・鶴川・白老、日高、平取・上貫気別を調査（～昭和13年）
1933年	(昭和8)	千島、シムシム島を調査
1935年	(昭和10)	シムシム島、ベツツ等の貝塚、竪穴式住居を調査 樺太、タランドマリ、トウフツ、ニイトイを調査
1936年	(昭和11)	千島、シムシム島、及川の竪穴式住居を調査 八雲、ユーラップを調査
1937年	(昭和12)	日本民族学会第一回北方文化調査団に参加 樺太、タライカ付近の考古学調査 シラハマ、シスカ、オッチホを調査 千島、シムシム島、コドマリ等を調査
1938年	(昭和13)	千島、シムシム島、ホロムシル島を調査 第二回日本民族学会北方文化調査団に参加 樺太、タライカ、ススヤ貝塚を調査
1941年	(昭和16)	樺太、オッチホ、ニイトイ、タライカ、タランドマリを調査
1945年	(昭和20)	東京大空襲で収集資料の大部分を焼失
1971年	(昭和46)	東京ニコライ学院英語部長就任
1974年	(昭和49)	函館市文化賞授賞
1976年	(昭和51)	吉川英治文化賞授賞「北方民族の旅」
1979年	(昭和54)	逝去、享年87歳

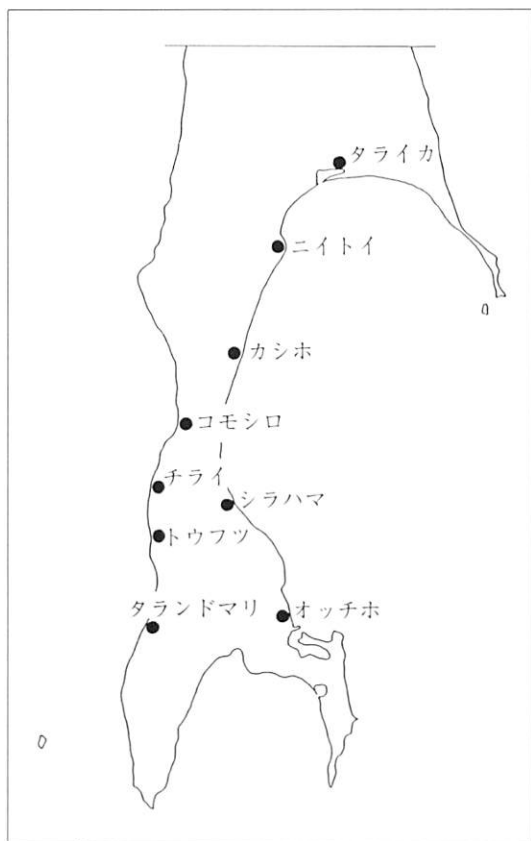


晩年の馬場 脩氏（前列右側）  
（昭和50年夏、函館博物館第5研究室にて）

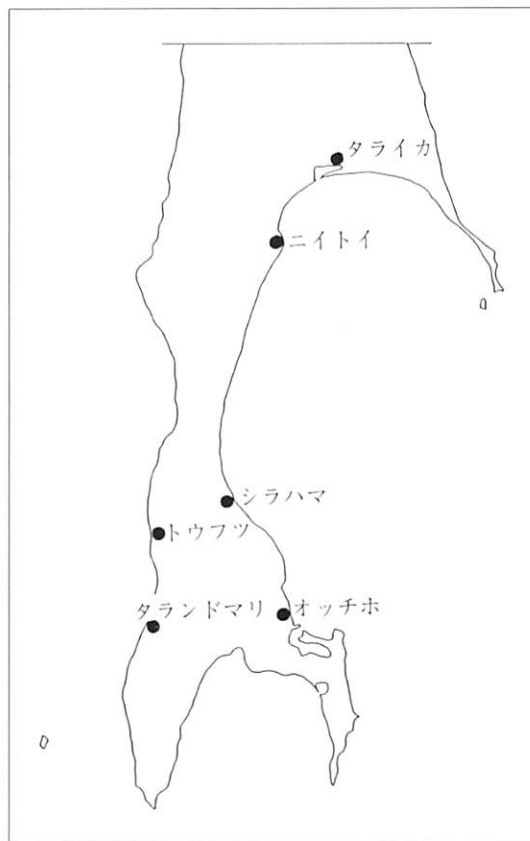


樺太・千島・北海道 略図

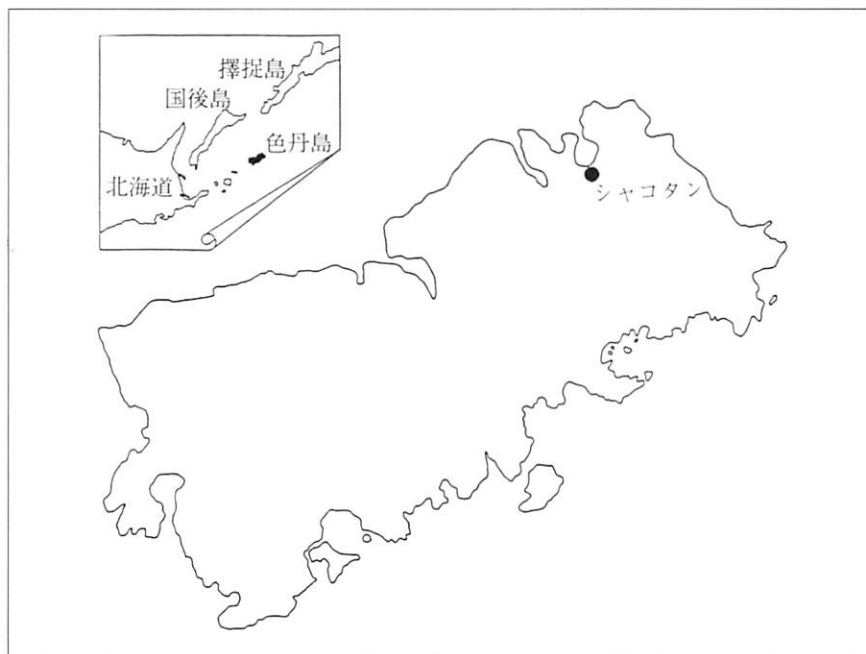




大正元年から3か年にわたって形成された樺太アイヌ集落



馬場 脩 樺太踏査地域



馬場 脩 色丹島踏査地域



## アイヌの生活用具コレクション一覽(2)

種別	資料名	収 集 地														合 計								
		タ ラ ン	ト マ リ	ト フ ツ	オ ツ チ ホ	シ ラ ハ マ	タ シ イ カ	ニ イ ト イ	色 丹	八 雲	鶴 川	白 老	ポ ロ サ ル	荷 負	ヌ キ ベ ツ		静 内	平 取	サ ル フ ト	虻 田	日 高	北 見	不 明	
収 納 具	イタルカマス								1															1
	袋 物							1																1
	ムリツチ							2																2
	太刀容器用ござ	5																						5
	罈容器用ござ	2																						2
運 搬 具	背 負 い 縄									2														2
	犬の呼び戻し					2																		2
	犬 の 帽 子					2																		2
	滑 車					1																		1
楽 器	口 琴																			3				3
	五 弦 琴			1		1																		2
喫 煙 ・ 発 火 具	煙 草 入	5					1			1										5				12
	煙 管					1	9																	10
	雁 首		1			1																		2
	パ イ プ						1		2															3
	火 打 入	5						1																6
	火 打 金																			1				1
服 飾 具	火 皿					2																		2
	首 飾 り	14							1										2					17
	頭 飾 帯	2				1													2					5
	耳 輪	4																	2					6
	ガ ラ ス 玉	1																						1
	帽 子	1				4																		5
	金 輪 付 帯	4																						4
	帯	1																						1
	金 具	1																						1
	帯 付 装 飾					1																		1
	衣 服 裂					1															1			2
脚 畔																				1			1	
そ の 他	衣 服																		5					5
	紐																		4					4
	不 明 品					1																		1
合 計		241	68	39	14	90	27	6	12	86	39	3	17	8	10	1	3	15	61	1	14		755	

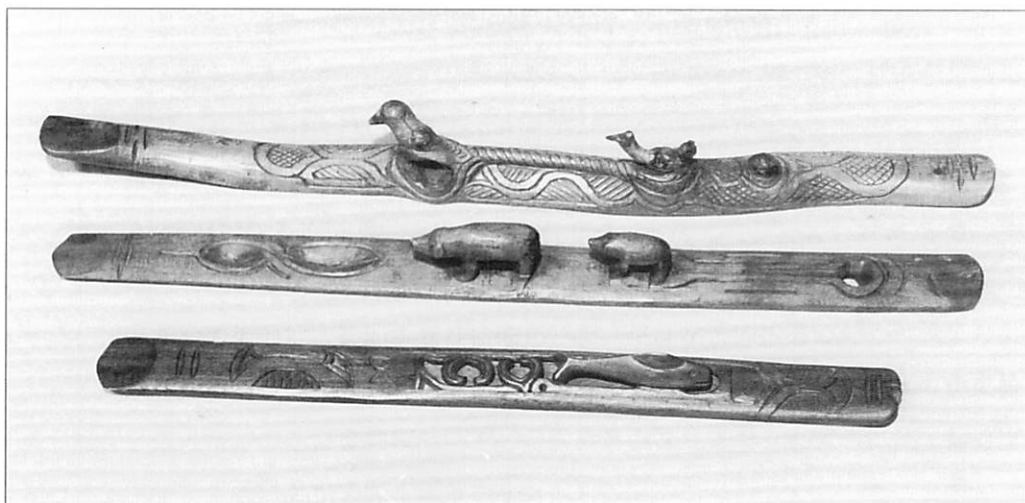
## 樺太アイヌの捧酒籠分類一覧

種別	収集地 形態	樺太西海岸		樺太東海岸			合計	
		タラドマリ	トウフツ	オッチホ	シラハマ	タライカ		ニイトイ
高彫動物	熊の全身	1	2			1		4
	熊の頭(熊送り)	2	1	1		1		5
	熊の足跡	1						1
	熊と海獣			1				1
	鯨	2	3					5
	鯨と船	1		1				2
	鯨と器物			1		1		2
	海獣と船	2		2			1	5
	海獣と船		1	1	1		1	4
高彫器物	鳥		1					1
	蛇	1						1
	船	1			1			2
	刀剣文様	3	2		1			6
	權			2				2
	弓		2		2			4
	椀	3						3
	岩盤状板	2						2
	巴文様	1						1
刻み目文	無	1				1		2
	×文印	1	1					2
	×印と笹葉型	5						5
	×印と／印	2						2
	笹葉型	2						2
	亀甲型					2		2
	その他	1	1					2
自然樹枝利用	窟と洞	5	1					6
	洞のくり抜き	4						4
	二又利用	4	2	2				8
	自然の曲利用	6	6					12
	洞を船に見立てたもの	1	2					3
	洞を利用	3						3
	洞に似せたもの		1					1
自然の捻目利用	8	3					11	
地文様	斜線文様	2	1			1		4
	ウロコ文様	3	2					5
	波文様	1	2	1				4
	タテ線文様	1						1
縄目文様	縄目透	6	6					7
	縄目稔	3						3
	結束文透	2	1		1			4
	結束文様	6		1	1			8
	縄目高彫透	1		3				4
	結び目文様	1	4	1				6
抽象文様	縄目文様	1						1
	欽先文様	5	2	2				9
	イナウ文様	7	1					8
	アシベ文様	8	4	1				13
	渦巻文様	2	2					4
	杏仁文様	2						2
	括弧文様				1			1
	S字文様	2						2
その他	菱形文様	2						2
	木葉文様	3	1					4
	文様板打付	3						3
不明文様	不明文様	5	6	5	4	1		21
	合計	129	56	25	12	8	2	232

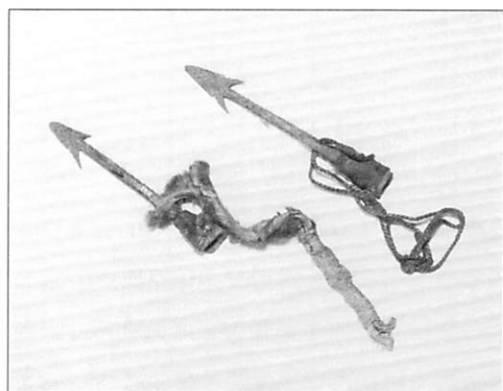
(国指定「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書第1篇より)

## 北海道アイヌの捧酒籠分類一覧

種別	収集地											
	形態	八雲	鶴川	白老	ポロサル	荷負	ヌキベツ	静内	日高	北見	不明	合計
高彫動物	熊の全身			2								2
	熊の頭(熊送り)			1							1	2
	熊と海獣				1						1	2
	船と鯨										1	1
高彫器物	船			1								1
	刀剣文様		1	2								3
	矢					2						2
	岩盤状	1										1
	家									1		1
	鱗文と透し樽状		1									1
縷文に透し						1					1	
地文様	斜線文様										1	1
	斜線刻み文様			1								1
	横線文様			1								1
	鱗文様		1	2			1					4
	波文様	1										1
波と魚文様	1										1	
抽象文様	イナウ文様		5	1		1	1					8
	アシベ文様		1			1		1				3
	渦巻文様			1							2	3
	杏仁文様		1									1
	括弧文様		1			1						2
	S字形文様		1	1							1	3
	菱形文様		2			2						4
	菱形波文様		1									1
	巴文様		2								2	4
	木葉文様		2	2		2	1	1	1			9
	刀剣文様			1		1						2
	唐草文様					2						2
	草花文様		1	2								3
	花文様						1	1				2
	笹の葉文様		1									1
	笹文様					1						1
	流水文様			1								1
	帆立貝文様						1					1
	乳頭形文様						1					1
	輪違文様										1	1
	五辨文様		1									1
	隅取角繁ぎ文様	1										1
	8の字文様							1			1	2
骨製はめこみ文様										1	1	
刻み目文様		2									2	
刻み文様			1								1	
合計		4	24	20	1	15	6	1	3	1	13	88



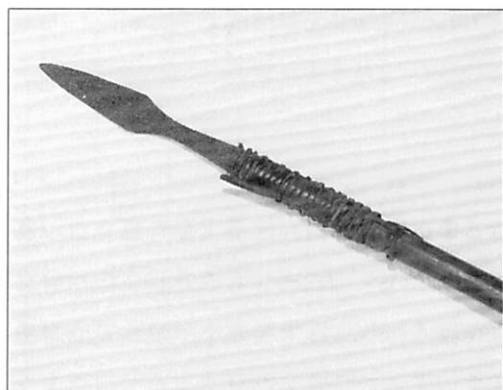
棒酒篋 収集地 樺太・トウフツ



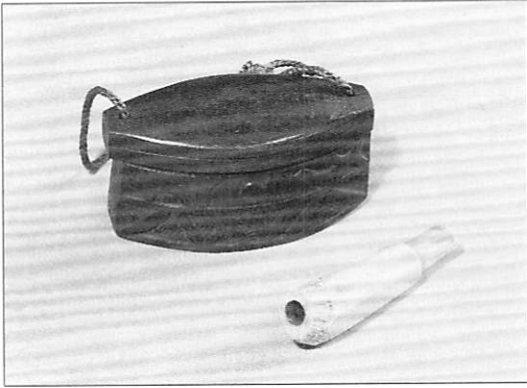
鉄銛 収集地 樺太・タランドマリ



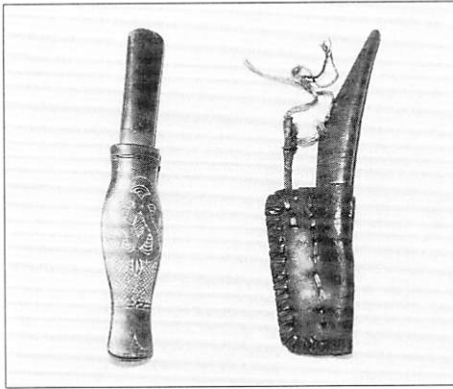
色裂置文衣 (ルウンペ)  
収集地 胆振・虻田



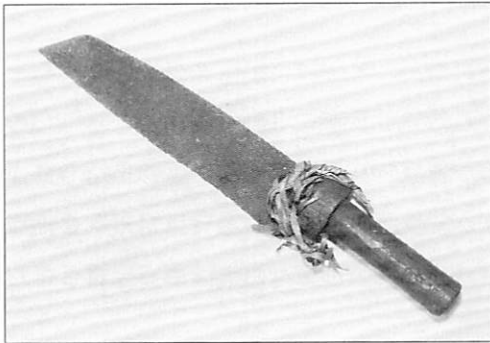
槍 収集地 樺太・タランドマリ



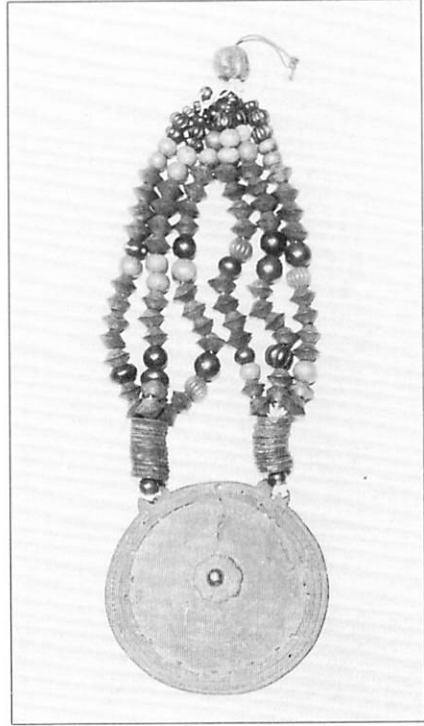
煙草入れ・パイプ 収集地 千島・色丹島



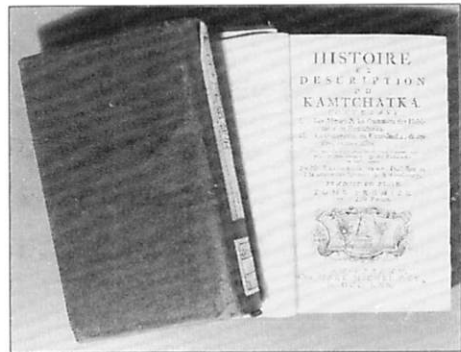
小刀 収集地 樺太・タランドマリ



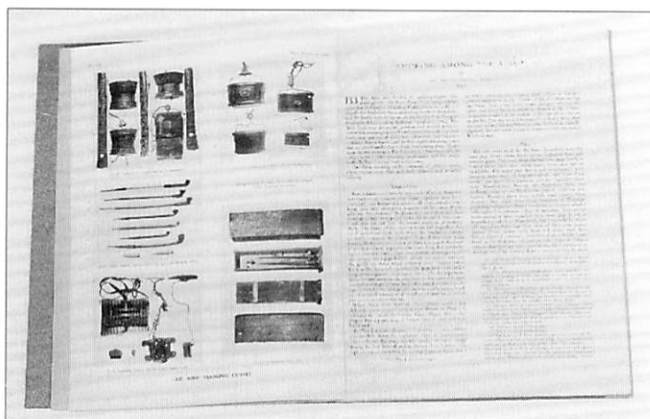
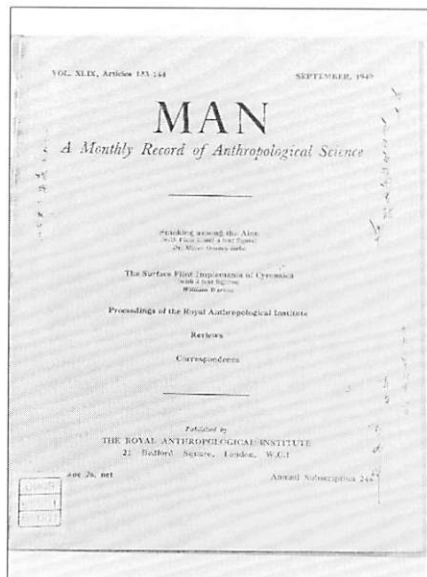
カジキ料理用庖丁  
収集地 胆振・白老



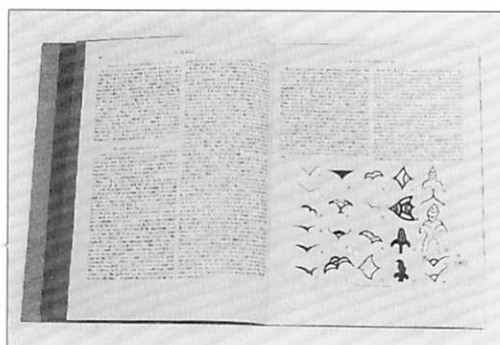
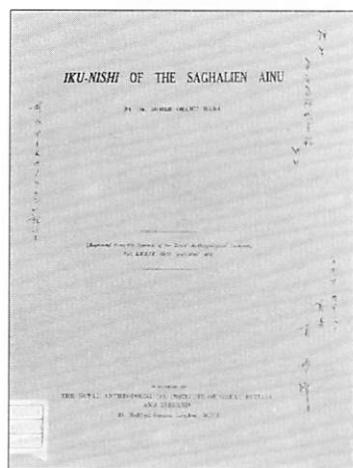
シドキ付首飾り  
収集地 胆振・鶴川



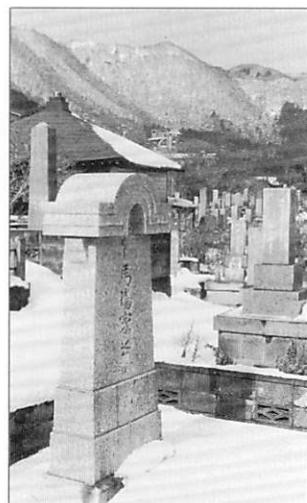
氏が千島アイヌの参考文献に愛用した  
「カムチャツカ探検史」クラシニコフ著 1741  
市立函館図書館蔵



Smoking among the AINU 人類学月報・MAN 第49巻  
イギリス王立人類学会 ロンドン 馬場脩著 1949  
市立函館図書館蔵



IKU-NISHI OF THE SAGHALIEN AINU  
イギリス王立人類学会ジャーナル  
第79巻 ロンドン 馬場脩著 1949  
市立函館図書館蔵



函館山を眺め住吉の共同墓地に  
眠る馬場脩



## 時代に生きる博物館像

— 市民本位の文化施設をめざして —

根本直樹

### <はじめに>

私は1988年の夏、函館で開催された「青函博」会場で、自分が関係した「道南歴史館」が多くの人に見てもらえる嬉しさを感じていた。また同じ年の冬、アメリカの博物館を視察する機会があったが、その展示のおもしろさに加えて見学者の多さに驚いた。このような経験から、最近、日本ではなぜこんなに百貨店には人が集まるのに、博物館には人が来ないのだろうかと考えるようになった。

このことについて、教育委員会関連の広報紙に「博物館は特別な場所でいいのか？」<sup>(1)</sup>というタイトルで百貨店の大衆化傾向と博物館とのギャップについて書いている。ちょっと乱暴な比較をしているように思われるかも知れないが！。しかし、博物館はこれまで集客力についてあまり問題にしてこなかったことも事実だった。「入館者数のみにこだわるのは、文化活動に対する理解のない証拠」として簡単にかたづけられるのが常であったように思われる。たしかに、博物館は人気商売とは違うかもしれない。しかし、だからといって博物館が市民に対して、入館の努力をしない、サービスを考えなくてもよいというものではない。反省も含めて考えてみる必要性を感じるのである。

百貨店も、以前には、「今日は帝劇、明日は三越」というコピーにもあるとおり、ある意味では特別な場所だった。しかし、経済成長という社会情勢の変化の中で、その消費者層の広がりや、消費レベルが質量ともに上がってきたことにより百貨店も質的に変化してきており、これまで以上に消費者を引きつける魅力づくりが必要になってきた。このような社会を背景に百貨店は、文化施設経営にも業態を広げようとしている。今や大都市圏における百貨店群の動きは、まちの人の流れを決定し、文化形成にも影響をあたえるようになってきており、その意味では「百貨店は街を創る」といっても過言ではない時代にある。

重ねていうが、博物館を百貨店と同じ次元で考えようというのではないが、時代の変化にともなう博物館の在り方についての議論を、市民のものにする時期にきているのではないだろうか。

本論は、博物館の大衆化の問題を、生涯学習・市民活動・施設の複合化という現代の特

徹的事項を踏まえて、博物館のリニューアル、そして文化施設の方向性について展望したい。しかし、ここではあくまで自分の経験上からの発想であるため、地方都市からの視点であることをお断りしておきたい。

## 1. 生涯学習時代の博物館像

### ① 生涯学習時代の課題

今後、生涯学習の振興は、1990年6月に成立した「生涯学習の振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」をもとにすすめられるだろう。この法律は、同年の中央教育審議会答申「生涯学習の基盤整備について」の提言を基にしており実質的には、都道府県における生涯学習の基盤を整備する施策となるものと思われる。

さて、先の中教審の答申でキーワードとして浮かんだ言葉は「開放」である。つまり、乳幼児期から高齢期に至る学習者の年齢の制約からの開放であり、学校・大学・民間施設など場所的開放である。そして、最も重要なことは市民の自主学習の援助などにみられる教育イデオロギーからの開放でもある。「教育」から「学習」への転換は、与える教育から学習要求の援助への転換を意味しており、このことは、今日の切実な社会的要求であると考えられる。

しかしながら、この答申にも問題を感じる点がある。一つは、生涯学習の基盤整備に代表される都道府県に設置される「生涯学習推進センター」と公民館に代表される市町村立の社会教育施設との連携ネットワークについてである。具体的には、放送大学にみられるようなメディアを通しての市町村への学習機会のサービスなどが考えられているが、このことは、学習機会の増大という点で喜ばれる反面、市町村の施設を受け手としての性格に限定してしまう危険性をもっている点を指摘したい。

またこのような問題は、行政間だけに存在するのではなく、行政と市民との関係においても内包していることに留意することが必要であろう。

もともと、「生涯教育」といわれていた時代から、言葉に関係なく、学習の主体者はあくまで市民であったし、さまざまな社会状況の変化に対応して活動しているのも市民であった。この事実を素直に認知することが私たち行政側の立場の者として重要であろうと思われる。ところが、「生涯学習が制度として政策の対象となると途端に、多くの場合自主性が失われるケースが目立つ。行政が与えるものと化す」<sup>(2)</sup> という指摘からも理解できるように、市民が自然な形で行っていた学習が行政側の規範によりゆがめられてしまうこともありうるわけである。教育行政と市民ニーズとはかならずしも一致する事ばかりでな

く、場合によっては行政が市民の学習意欲を疎外する場合もなかったわけではないと思われる。市民の主体的な活動に対して、行政がどう援助、支援していくのか、その体制はどうか確立するのが課題としてあげられる。

もう一点忘れてはならない課題がある。それは、高いレベルでの施策ばかりでなく、潜在的学習者の発掘を通して学習の大衆化にむけてのプログラムの必要性である。つまり、文化的サービスは、ともすると、特別なサービスという行政側の判断が大半を占めていたのが現実であった。活発な文化的環境が地域に定着することを理想とすれば、もっとも市民層の中で多数を占めている、この潜在的学習者へのアプローチを忘れてはならないだろう。

## ② 博物館の世代論

このような生涯学習の時代にあって、博物館はどのように変わり、また今後どのような姿が求められているのかについてみてみよう。

博物館のイメージは、当初「蔵」のような資料の保存施設であった。その後、1960年代後半以降の急激な博物館建設ブームにおいて、資料の公開を運営の軸とする「展示館」へと変化している。そして、この間にも博物館内の様子は少しずつ変わってきている。つまり、博物館は単なる展示場から、常設展示と特別展示場とに分かれてきたし、体験学習室あるいは収蔵展示室などができ、最近では視聴覚サービスにより図書館的傾向もみせてきている。このように博物館の運営も古い博物館に付加価値をつけて新しい博物館づくりをめざしている。

しかしながら、市民が博物館にいだくイメージは、あまり変わることなく、集客力においても進展もみられないままの状況が続いている。この理由として、博物館の運営が博物館側からの論理だけでなされてきた結果だということが考えられる。

さて、こうしたわが国の博物館運営と対比的なのがアメリカの博物館運営だと思われる。漠然とした印象として、アメリカの博物館のコンセプトは、ディズニーワールドのめざすところの「イメージネーション・発見・教育・冒険の常設世界博」<sup>(3)</sup>とかなり近いのではないかと思えるほど楽しい空間だった。そして、また、このようなアメリカの博物館の考え方は、ヨーロッパへも影響を与えたことが知られている。このことをよく説明しているのが大英自然史博物館前古生物学部長アラン・チャーリック氏の講演<sup>(4)</sup>である。

それによると1970年代の初め大英自然史博物館は、新館長を迎え、館長自身がアメリカの最も現代的な博物館を訪れたり、何人かのスタッフをアメリカで学ばせたりして新博物館政策をつくっている。その結果、博物館を「教育の場」として位置づけ「サイエンス・

センター」に変えたのである。この具体的な事例として魚類・両生類などの展示を廃して、「人間生物学」の展示をつくりあげたのである。

このことは展示の主流であった標本による分類展示から、模型や写真などを多用するビジュアルな展示への移行を意味している。

このような変化に同氏は「博物館がサイエンスセンターになってしまったら家で本を読むのと同じことではないだろうか」と疑問を持ち、「人々は実物標本が見たいから博物館に来るのではないかと」と標本部門の重要性を述べている。

私が、1982年にヨーロッパの博物館事情を視察に参加した時は、着実にアメリカの博物館の影響が広がりつつもまだその変わり目で、多分「人間生物学」がすべて完了はしていなかったと記憶している。この時の印象は、テーマの新鮮さにびっくりしたことと、見学者の反応も、若い層を中心に良好であったと思われたことである。

このような世界的な博物館運営の変化は、1980年代に顕著にあらわれており、その影響力がアメリカの博物館によっていたのである。その理由として、博物館の運営主体の違いが考えられる。つまり、わが国やヨーロッパ諸国にみられる行政主体の運営と、アメリカの民間主体による財団経営との違いである。このことは、博物館と市民との関係から生まれる文化施設づくりのイメージの違いにも反映しているのではないだろうか。

さて、わが国においても新しい博物館像の提言がいくつもなされている。

上田 篤氏は、ミュージアムのミューズとディズニーランドなどのランドを合成した「ミュージランド」の造語によりディズニーランドのような観客参加型の博物館像をイメージされている。そして、博物館は日本人の持つ大衆文化をベースにした社会教育施設ではなく、学術施設であり、文化施設であるという考え方を提唱している。<sup>(5)</sup>

諸岡博熊氏は、企業博物館運営から導いた第三世代の博物館像を企業におけるC I（コーポレート・アイデンティティ）と同じように博物館においてもM I（ミュージアム・アイデンティティ）の必要性をとき、時代の変化に対応する博物館の意識の変革であり、展示や運営活動の変革をとнаえている。<sup>(6)</sup> 具体的な事例として、「いわゆる教育といって知識の詰め込み作業を行わないで、自由な雰囲気の下、観客の持つ情報と展示物の持つ情報を互いに交流させ、新しい情報を創出することの手助けをする。そして、その形式に役立つ文化活動を行うことである。そのためには、見せてやるといった考え方でなく、見る人の側に立った発想を重視する」という姿勢を強調している。

また、伊藤寿朗氏は市民参加を強く意識し、「第三世代とは、社会の要請にもとづいて必要な資料を発見し、あるいはつくりあげていくもので、市民参加、体験を運営の軸とす

る将来の博物館である」<sup>(7)</sup>と展望されている。

以上から、これからの博物館は、「モノ」から「情報」への広がりが必要で、市民参加によるコミュニケーションの場でもあり、楽しい空間でもなければならぬことが求められている。

このような新たな博物館のイメージに応えるためには、今の体制だけではとても無理な話である。しかし、このような時代の流れだけをみて悲観になる必要はないと思うのである。なぜなら、もうひとつの重要な時代の流れを感じることができるからである。このことを次にのべることにしよう。

## 2. 市民の文化活動の動向

### ① 博物館活動への市民参加

生涯学習時代において、博物館も現在大きな転換点であることは先にのべたとおりである。博物館は「学術資料や文化遺産を保管し、それらの博物館資料を活用するだけにとどまらず、文化を新しく創造し、発展させていくための拠点であり、市民生活にかかわる新しい情報提供の場であり、知的な欲求を満足させるレクリエーションの場、あるいは学習意欲をかきたてる動機づけの場になる」<sup>(8)</sup>ことが望まれている。

さて、これらのことについて市民はどのように考えているのか参考になる資料があるので紹介したい。私は、1982年の市民講座担当に当たって講義形式だけでなく、調査を受講生と一緒に行うことにした。そして、この市民講座を企画展開催の前提とし、受講生の調査成果を企画展「商いの顔・看板展」にいかすことにしたのである。このプログラムは2回継続され、その後思わくどおり特別展「商いの顔」展へと発展することになった。

ここで紹介するのは最初に行った市民講座「函館の商家」に参加した受講生の感想である。この時の受講生は30代から70代までの6人で、以下にすべて紹介する。

○一つの事象をとらえ、前後左右から解明してゆくことは楽しいものだ。このたび参加し、みな経験不足ながらまとめてゆく喜びを知った。函館に埋もれている貴重な資料が数多くあることを知り、今回の事業を拡大し継続し調査してみたい。そのためには参加者にその旨を徹底させ、意図することを充分知らせる必要がある。(風間善司)

○取材のため西部方面を歩く、新旧交差する街並み、奇妙な思いにかられる。少年時代に遊んだ埋立地の石垣、小熊倉庫や相馬倉庫裏での泳ぎやカニとり。今は無き友の家や商い跡、大黒座、弁天座の立看板やのほり、菊泉、㊦和田、㊧酒谷等大商店に掲げられた酒の模型看板、今も厳然としてしている日本銀行、旧第一銀行、旧安田銀行、特異な建築

の相馬商事等がすべてなつかしいのである。静かなたたずまいの会所町、天神町、船見町、元町、冬の遊びのだいご味を満喫させてくれた坂のそりすべり等、回想は尽きない。もっと時間をかけて古き函館を発掘したいものである。(中村一雄)

○夫の転勤で、北海道に来た私にできるだろうか。そんな不安を感じながらのスタートでした。実際に老舗を訪れて見聴きした事柄を古い記録と対照してまとめるのは、講義を聞くのと違って根気のいる学習でした。けれど、館員の方をはじめ受講生の方々に援けられ、情報や意見を交換しあって回を重ねるにつれて「商いの顔」である看板の性格や、函館の商家がたどった足跡の片りに触れることができ、今後の学習が楽しみになりました。そして、知識、経験豊かな個性あふれる人達の出会いは、これから函館に住む私にとってもう一つの大きな収穫だと思いました。(尾崎黎子)

○初め思いがけない事になったと思った。生来の無頼、人に話す事が苦手で、とても人様の家の訪問など出来るはずもない。19才の時から66才まで船に乗り続け、書くことは機関故障の時、いかに自分には責任が無いかの始末報告を作り上げる事だけだ。幸い資料調べの方にまわしていただいて助かった。自分の知っている家のことなど見つけると、ついそっちの方へ目が行くのでろくな調べもせず申しわけないと思っている。しかし、いろいろな本を読ましていただき楽しかった。図書館の係りのひとの御親切もありがたかった。(鶴巻六郎)

○あれ、講師の先生がいない、何、私たちが調査して期日までにテーマを消化するとは、「ちょっと待ってよ」。でも先輩の後から調査、資料探し、でも窮した。まず、明治、大正時代のことが解らない。昭和二ケタの下の生まれである。だからこそ廻り道をした。おかげで頭の中に刻み込まれた。ただ聞くだけの受け身でいたら耳の途中で止まって消化不良をおこしていたと思う。おかしな話したが、博物館よりも、いままで以上に図書館が開かれていたと感じた。逆に博物館自体も展示の中にもあえて私たちが参加するまでゆかなくとも開かれていなければならない建て物だと思うのだ。今回の講座で博物館の企画や展示になんら関係なかった私たちが自分たちの手で展示を作り、調査し、それに対して資料館という建て物を提供してくれ使用することが出来るんだという事で、ひょっとしたらまた何か出来るんじゃないだろうかという可能性をも得たように思えた。このような方法で、小さな講座を積み重ねてゆくうちに、我々の方から博物館を使用し、「あれも、これもやろう」と動きだしたら大成功と思うのだ。だって本来「我々の町の私たちの建て物なんだから」と感じてもいいのではないだろうか。(山下理恵子)

○私たちの博物館であり、郷土資料館であると思う。だが、そのスペースはいつも死ん

でいるというのが実感だった。物の質量や、予算や広さとかの問題でなく、私達の今の暮らしにとって、またプロからアマチュアまでに常に対応して行こうとするシビアな姿勢や情熱が、館全体から感じられなかったからだと思う。それがなければ、どんなに素晴らしい物たちも生きて来ないと思うからだ。今回の市民参加講座は、そんな実感に一石を投じるチャレンジとして高く評価したい。これを進めるにあたり、自らにも厳しく、また各人の持ち味を生かすような心使いされた館員の方の態度には、感銘を受けることも多かったが、このように私たちも学び、逆に私たちからも学ばれたと思う。一方通行でない限り、もっと利用したいし、協力も可能だと思う。そうでなければ、私たちの博物館であり、郷土資料館であると真にいえないと思う。(永田史明)

以上のとおり、市民は学ぼうとしているし、参加しようとしていることが理解できる。そして、私はこの体験を通して博物館が、コミュニケーションの場としての大切さをしらされたのである。つまり、博物館における市民参加は、学習者としての市民参加ということにとどまらず、市民と市民とのコミュニケーションの場を創りえるという点でも重要だと思われる。このことは、博物館の情報提供が機械化されたシステムと市民との関係だけでなく、市民と市民との情報交換システムを提供できることをも意味している。つまり、博物館あるいはそのほかの文化施設は情報提供において、人と人とのコミュニケーションを疎外しないように留意することも必要であろう。

## ② 「元町倶楽部」に見る市民活動

私たちは、時々大きな誤りをおかしていることがある。それはよく市民の「高度教養時代」という言葉を口にするが、実際に行政と市民というレベルで仕事をする場合、市民の教養の高さを忘れがちである。博物館の仕事でも同じようなことがいえるのではないだろうか。そこには、行政に本来の市民主体の立場にたち学びあう姿勢が求められている。

これからの行政は、もし市民活動を謙虚に評価できなければ、逆にそっぽをむかれてしまう危険すらあると思っている。現代は、そういう意味でも行政と市民との関係の転換点にあるとあって良いのではないだろうか。そして、このようなことを実感させられた函館における市民活動の実践例をここに紹介する。

元町倶楽部の仲間は、ギャラリー店主、呉服屋の若旦那、ペンション店主、ピアノ教師、不動産を扱う人間もいれば建築家やデザイナーも、さらに書き出せばきりがないほどきわめて多種多様である。そのぶん活動も広範囲で、「ハウスウォッチング」活動の提唱と実践やら、西部地区の“秘境”の探検、音楽、映画、演劇といったイベント開催などなど、一見脈絡のないものとなっている面もあるが、元町を中心とした西部地区の魅力に引かれ



ながら、地域文化にこだわりを持った多様な活動を続けてきている。

1988年からは、それまでのイベント中心の活動に加え、「港町・函館における色彩文化の研究」と題し、洋風建築物のペンキ色彩を素材に、“こすり出し”という平易な手法による市民レベルの研究活動も実践してきている。

現在は、研究活動の延長線上として“じろじろ大学”を開校しており、地域文化の掘り起こしとまちづくりの実践的活動に取り組み、地域文化の情報センターとしての役割りを果たすことを夢みている。

ここで特に、元町倶楽部に関心をいだいたのは、「港町・函館における色彩文化の研究」に関する活動である。同研究の評価は、トヨタ財団主催の研究コンクールにおける最優秀賞の授賞によくあらわれているように、その「色」を切り口にしたセンスの良さとフィールドワークを通しての研究の質の高さについてである。

そして、彼らの活動は研究報告会、シンポジウム、ワークショップ、展示会などの開催などを通して市民に少なからぬ影響を与えている。このような活動は、まさに博物館的である。

今までに、私は元町倶楽部主催の事業に受け手として参加し、多くの学習ができた。そして、彼らの活動へのとりくみかたにも学ぶ点が多いのである。つまり、元町倶楽部の活動から市民活動の主体的エネルギーのすごさを謙虚に受けとめることができる。

以上のとおり、市民活動と市民参加という時代の流れは、生涯学習時代に求められている博物館像と矛盾することなく、そのバランスを保つことができるものと期待しているのである。

### <元町倶楽部の地域活動>

- '86 ・函館元町に冬のまつりを創る会誕生（元町倶楽部の母体）
  - ・第1回はこだて冬フェスティバル開催
- '87 ・寒川探検隊
  - ・会場レストラン構想（市港湾部）に対する反対活動
- '88 ・北の文化の現在'88（三浦雅士・谷川俊太郎・浜田剛二）シンポジウム函館会場主催
  - ・研究グループとして「函館の色彩文化を考える会」が誕生「港町・函館における色彩文化の研究」に取り組む
- '89 ・北の文化の現在'89（三浦雅士・諸井誠）シンポジウム函館会場主催
- '90 ・マンション問題に対して、高層建築を考える会が結成



- '91
  - ・トヨタ財団主催「“身近な環境を見つけよう”研究コンクール」において最優秀賞を受賞。
  - ・地域史研究はこだて13号に「港町・函館における色彩文化の研究」を寄稿
  - ・函館文化会より、神山茂奨励賞を受賞
  - ・函館市より函館市歴史的景観賞を受賞
  - ・じろじろ大学活動開始
- '92
  - ・函館の歴史的風土を守る会より歴風文化賞を受賞

### 3. 企業の文化化と複合施設の時代

博物館法には、博物館のあるべき姿を表わしても、いかに市民に接近していくかについては語ってくれない。そして今、後者についての議論が大切な時代になっている。つまり、博物館の経営センスの問題であり、百貨店経営を研修した意味もここにポイントがある。これらの百貨店経営にもみられるひとつの時代の流れがみえる。現代は施設複合化にみられるように「コンプレックス」の時代といえよう。このことに留意する理由は、博物館が都道府県レベルと、市町村レベルでの規模や情報サービスなどの較差をこの方法により解消できないかという展望からである。

#### ① 複合文化施設の事例

##### a. きゅりあん（品川区立総合区民会館）

「きゅりあん」は、一般公募により選ばれた品川区立総合区民会館の愛称である。ラテン語の集会所を意味する「キュリア」が語源の造語で人が集まり、ふれあうようにとの願いを込めてつけられたとのことである。

きゅりあんは、京浜東北線と東急大井町線の交差するJR大井町駅前に位置する。

この駅前再開発の考え方は基本構想によれば、行政・文化のシンボルとして総合庁舎と総合区民会館（きゅりあん）が実在するが、今後さらに区を中心核として発展させるには、地価高騰などによる公有地確保の困難性を考慮すると、民間企業の利益地元還元と文化的事業への進出を協力要請し、官民双方の相乗効果をねらった文化・コミュニティと商業と複合施設の誘致が可能であるとのことである。

さて、きゅりあんは多目的ホールを中心とする貸館施設で、財団法人品川振興事業団により運営されている。きゅりあんは丸井と同じ建物の中にあり、官民による複合施設であるばかりでなく、消費者・婦人母子福祉・ボランティアの各センターや高齢者相談室を含めた区民の生涯学習の場やコミュニティ活動の核となる施設となっている。当該施設の

区での窓口は、企画・広報部に所管し、教育委員会の公民館とは直接的には連動していない。

#### b. 湘南台文化センター（神奈川県藤沢市）

湘南台文化センターの概要は、パンフレットにもとづいて紹介すれば、次のとおりである。湘南台文化センターは、21世紀を担う子どもたちの宇宙へのロマンと未来への愛をはぐくむ“こども館”、市民のみなさんの文化活動の輪を広げる“市民シアター”や“公民館”、地区の新しい拠点となる“市民センター”からなる複合施設である。“創造する文化”の拠点施設として湘南台文化センターは、〈こども〉〈地域〉〈対話〉の3つを基本理念として建築様態から各施設、展示内容などのすべてが構成されている。

湘南台文化センターは、組織的にみると社会教育部所管の湘南台公民館と自治文化部所管の湘南台市民センターおよび湘南台文化センターの複合施設である。この中で、湘南台文化センター（市民シアター+こども館）の管理については、財団法人まちづくり協会に委託している。

このセンターで、特に注目したいのは、長谷川逸子氏の設計による建物自体の魅力である。建物全体のデザインは環境的メッセージを含んでいるし、機能的にもうまく構成されている。言い古されているかも知れないが、文化施設を建設する場合には、それなりのデザインに留意したいものである。このセンターを見学する動機も、建物を見たいということからはじまったのである。

#### c. コメント

複合施設の利点は、土地利用の高度化と情報の集積にあり、施設のネットワーク化の推進にみあった施策である。ここではその結果に付随してみえてきた施設の場所と規模について考えてみる。

複合施設の立地は、先にも示したとおり、駅前などの再開発などの中に含まれることが多い。その結果、公民館や図書館が市街地の中心部に位置することが可能となり大きな市民サービスとなっている。具体的な例として、駅前の一等地に開館した厚木市立中央図書館は利用実績も良く、「通勤通学や買物の帰りにみすぐ寄れる市民の利用しやすい位置に建設してよかった」<sup>(9)</sup>と複合施設化の成功を報告している。

私は以前から郊外の公園に文化施設をつくるのがパターン化していることに疑問を持っていた。なぜなら、集客力を高めるためには、当然、利用しやすい場所つまり市街地に施設があるべきだと考えていたからである。そして土地所有の制約がある場合でもビルの中にテナントとして入ることもこれから考えなければならない時代であろう。

## ② 百貨店経営の事例

### a. 西武セゾングループ

西武百貨店におけるビジネスの発想は、「今の時代、人々はモノを求めて店や街に出かけるのではなく、店や街自身の面白さ、楽しさを期待して出かける。そんな人々に対してひとつの店だけが努力しても、そこにはおのずと限界がある。いろいろなタイプの店や施設が組み合わせられることによってはじめて1+5が7や10の力を発揮し、そこに楽しさや珍しさ、情報といった付加価値が加わって魅力を発揮するのである。複合（コンプレックス）化の強みである<sup>10)</sup>」との認識にあり、その具体的な事例を以下で紹介する。

西武百貨店についてのフィールドワークは東京の渋谷、池袋、銀座、尼崎市の「つかしん」の4ヶ所を実施している。

渋谷 百貨店（A館+B館）+SEED+LOFT+PARCO

池袋 百貨店（食品館+LOFT+LOFT SPORTS+セゾン美術館+コミュニティカレッジ+リプロ）+WAVE+PARCO

つかしん 百貨店+専門店街+文化施設+スポーツ施設

このようにセゾングループは、基本的に複合化された店舗形態が特徴的である。しかし、これまでにするにはかなりの時間がかかっている。

つまり、西武百貨店とは別に青山において「無印良品」、六本木に「WAVE」（音と映像の専門店）、渋谷に「LOFT」（雑貨類の専門店）、「SEED」（アクセサリとも衣料品とも分類しかねるパーツの専門店）などの専門家を独自に展開し、そのセゾンブランドを増していった。これらのブランドが一定の市民権を得るようになって、渋谷では連携し、池袋では合体するという形態の違いはあるにせよ複合化するという戦略をとったのである。

このように、大都市での百貨店という枠を超えた街づくりの代表が池袋・渋谷であるのに対し、郊外型の街づくりの代表が「つかしん」ということになる。つかしんは、単なる商業空間から、モノとコト、モノとヒトとの関わり合いが作りだす生活空間への発展、暮らしを創り、楽しむ街空間の創造、そういった新しい生活集積を展開していくひとつの試みである。

セゾングループは、このような物販を中心にしたフレキシブルな業態をもっていることが理解できる。しかし、もう一面大切な点は、それ以外の分野、つまり不動産事業、保険事業、クレジット事業など生活に伴う情報を商品として消費者に提供している実態も忘れてはならない。

有楽町西武マリオンは、銀座という地域ブランドの中に高級化した百貨店のイメージを定着させる目的とともに前記した内容をコンセプトにすえ、百貨店を超えた生活総合産業化戦略を試行しているのである。まさに、ここにも「物」から「情報」へという流れを感じることができる。

#### b. その他の百貨店

一般的な百貨店の動きは「伊勢丹、横浜そごうが相次いで10万平方メートル級の巨艦店を目指す背景には、日本経済の構造変化が見逃せない。内需主導の経済成長が定着、消費者が多様化、高度化するなかで百貨店も品ぞろえの豊富さを問われているわけだ。既に百貨店業界では店舗の大型化が活発<sup>(11)</sup>」という新聞記事から理解できる。

つまり、百貨店経営の方向性として大きく二つに分けると、「拡」百貨店と「脱」百貨店が考えられる。前述したセゾングループは後者を指向し、そごうに代表される百貨店は前者ということになる。たしかに上記の記事にも見られるように百貨店の大型化は方向性は違っても全体的な動きであることには違いはないと思われる。

また、百貨店経営にあって共通したギャラリーによるシャワー効果（上部階での展覧会を見にきたお客がフロアを降りながら買い物をしてくれる）を期待する時代より、本格的文化施設の経営に参画する時代へと変化してきている。つまり東急Bunkamura、新神戸オリエンタル劇場、セゾン劇場などがその例である。このことは百貨店が物販だけでなく文化事業へも参画しているというイメージアピールであり、まさに「脱」百貨店のひとつの戦略と考えられる。

#### c. コメント

セゾングループとダイエーグループは、証券やファイナンスと物販の複合化という共通した事業開発をしている。しかし、一般的には企業としてのイメージは両グループには差異がありそうである。その例として、ダイエーが買収したホテル業における「オリエンタル」と百貨店業における「プランタン」の高級ブランドイメージが効果的に生かされていない点からも理解できる。

つまり、西武百貨店と関連して「WAVE」や「LOFT」のオリジナルブランドが成長し、その総体としてのセゾングループの企業イメージが高まるのに対し、オリエンタルとプランタンについてはダイエーのイメージがマイナス効果として影響しているような印象を受けた。

これから、企業にとってのブランドイメージのネットワーク化の優劣が企業イメージに大きく影響を及ぼす気がするのである。ただし、イメージ戦略がそのまま企業利益に直接

的に連動するかどうかは疑問の声も多い。

このように、百貨店は、ただ商品を販売するというイメージではとうていとらえられない程成長している。百貨店の経営は基本的に利益をあげるための手段として複合化や「脱」百貨店を実施していることは言うまでもない。だからこそ百貨店は、消費者ニーズを大切に考えるし、より高いサービスを提供しようとしている。これからの博物館の運営面でこの経営センスを生かしていくことがたくさんあるような気がする。

### ③ 企業のC Iを通しての複合化の事例

#### a. 松屋とI N A X（旧伊奈製陶）の場合

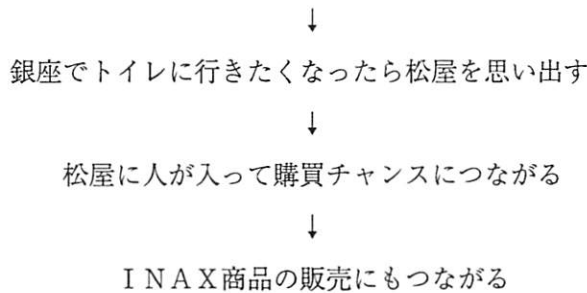
個業化の時代と呼ばれる今日、企業が際だった個性を発信しようとするれば新しい企業哲学、新しい企業文化、新しい事業構造、そして新しいコミュニケーション体系の構築にいたる新たな方法論が要求されている。これに答える作業が、先にもふれたC I（Corporate Identity）であり、そのなかに複合化という視点も含まれている。

松屋は銀座の老舗百貨店であるが、銀座の低迷と合わせて昭和50年代には危機的状況であった。この時、思い切ったC Iを実行し、地名と合わせた大胆なブランド戦略を採用した。それがM A T U Y A G I N Z Aである。このC Iの中で百貨店の原点に戻り、多くの出会いをつくるのが百貨店の魅力づくりの出発点とし、顧客を大切にするソフトを多く採用した。その例としてギフトングスタジオをもうけ、物を買うだけでなく、それを贈る行為を楽しんでもらうシステムづくりなどがあげられる。また、世界の博物館・美術館のオリジナル商品を販売している「ザ・ミュージアムショップ」コーナーや日本デザインコミュニティのメンバーが選定したデザイン商品を販売する「デザインコレクション」コーナーなどユニークな店舗内空間をつくりだした。

I N A Xは、タイル、衛生陶器、システム・キッチン等、水回りの建築部材を供給する会社である。この関連業界は閉鎖的な市場構造でI N A X自身もなかなか実績を伸ばせないうでいた。この点を踏まえたC Iの結果、建築家から直接ユーザーに接近する方法がとられた。つまり、部材というイメージを越えて生活環境美をX S I T E（エクサイト）やX Y L I F E（エクシーライフ）というショールームにて提案するという実験的象徴事業を実施したのである。

さて、松屋とI N A XのC Iを担当した会社と同じだったことから百貨店のトイレの改装が同社より提案された。つまり町内でトイレに行きたくなったら女性の83.3%は百貨店を思い出すという統計数値からも次の展開が期待できることになったからである。

松屋のトイレはI N A Xのショールーム化



このように、C Iを通して企業の複合化も実施されているのである。

#### b. 企業と行政の場合

生涯学習時代に関連しても企業との連携はもう無視できない課題であることは前に述べた。企業経営面からみても「企業のあるべき姿を追求していくと、企業が顧客、消費者、生産者といった人たちにいったい何がなせるのかといった目標設定ということになる。そして、この対象となる人たちは、行政にとって住民、市民と呼ばれる人達と同一である。そのため受益者市民という共通の目標に向かっての理想的なアプローチではどうしても企業と行政が結びつき、そこに文化的貢献としての行為が生まれにくいことには、大きな力となりえない」<sup>12)</sup>とあるように重要な時代的な要請でもある。

しかし、実際には、企業と行政との複合化の遅れがもっとも顕著であろうことが、アメリカの博物館とわが国の博物館運営の違いにもよくあらわれている。その理由は税制の問題はあるにせよ文化事業への国民のスタンスの違いがあるような気がしている。しかしながら、大阪市立科学館のように約60億円の建設費を関西電力が負担するという事例も最近では見受けられる。

また、神戸市のメリケンパークにある神戸海洋博物館では、展示費用13億円のうち、5～6億円を約90余の企業・団体よりの寄付によっている。そのため展示場内の随所に企業名を書いたプレートが、費用に見あった形で展示ケースの前に貼られている。同館は、社団法人神戸港振興協会が運営しており、市の港湾局がその窓口となり、神戸港のインフォメーション的役割を担っている。

#### c. コメント

企業が独自で劇場やギャラリーなどを積極的に経営の一部として取り入れていることは前にも紹介した。また企業のショールームの出展も最近増える傾向にある。そのショールームは自社製品の宣伝にとどまるのではなく、かなり教育的ディスプレイを採用している。つまり、小さな企業博物館ともいえるかもしれない。これらの動きはすべて企業のC Iに関連した文化的経営戦略により企業イメージを高めるのが目的と思われる。

しかし、企業の文化化の速度に行政の企業化の速度があわず、行政の企業との関係は、なかなか良い効果をあげていない。一つの例として神戸海洋博物館で見た企業のネームプレートはほとんど企業イメージをあげる効果がないのではないかと思った。これに対し、シカゴの産業科学博物館ではコンピューターの展示場を「IBMギャラリー」と称して企業の援助によることを明記している。もちろん、寄付金の違いはあると思われるが、行政も正当な企業利益というものを考える時期にきているのではないだろうか。

企業との複合化が市民へのサービスになっているのであれば、当然そのサービスの担い手をアピールすることが行政責任を逸脱したことにはならないと思われる。まさにこれからの地方自治体はC Iを通して行政の企業化が求められている。

また、行政と企業との複合化の中で忘れがちな視点は、まちづくりへの影響力の問題である。これまで、行政主導ですすめられてきたまちづくりが、今後都市化にともない企業の参画の重要性が増すばかりでなく、そのモラルが問われているように思われる。地方都市にあっても、今後このような企業と行政との複合化は、市民サービスを軸に研究の必要な分野であることを指摘しておきたい。

#### 4. これからの博物館運営とセンター構想

これまでに生涯学習時代・市民活動の時代・複合化の時代という時代の三つの波を体験してきた。博物館は、この波をうまくのりこなすような意識改革が強く求められている。

これまで学芸員は1人しかいない館が多いという事情もあって、博物館の事業をすべてこなせる学芸員であることが求められていた。しかし、本来は博物館法の中の「学芸員は・・・」とは職種を意味しており、「一人の学芸員が・・・」ではないと理解している。このために、これからの博物館の運営は基本的に三つのセクション(研究部門・事業部門・総務部門)により構成されるものと考えている。

さらに市民への「情報センター」としての役割を担うためには、関連する施設の複合化を通して「センター構想」を検討したい。

##### ① 研究部門における三つのフィールド

博物館は、他の社会教育施設と違う点として、情報を生産できる唯一の施設である。ここに今後とも博物館の存在の重要なポイントがある。そして、このことが博物館運営の基本であるといっても良いと思われる。このセクションによる事業は、主に調査・研究が考えられ、館独自の調査・研究、市民活動への援助、施設間のネットワークの三つのフィールドが考えられる。



### a. 館独自の調査・研究

博物館独自の調査・研究は、その対象地域と対象物について、ときに問題となることがある。ひとつには、調査地域が行政範囲に規定されるか否かの問題である。実務的には前者の場合が多いにしろ、本来は調査地域と行政範囲はイコールではないと考える。

函館の地域性を特別史跡「五稜郭」を例にとって考えてみたい。五稜郭は、幕府により奉行所の設置場所として築造されたものであり、当時としては国の段階での施策であった。つまり、五稜郭は函館市域に存在するが、その調査範囲は当時の外交的問題を内包した世界史の中で考えることが必要な事項といえるのである。その他にも函館は、領事館や北洋漁業の課題など、いずれも世界的な視点で調査・研究が要請されている。まさに国際化の時代である。

次に、博物館の対象となる「物」のひろがりについて考えてみる。これまでの調査・研究の対象物は「大学や研究所とは違った性格をもつはずであり、もつべきであった。まず考えられることは「もの」をベースにした研究である<sup>13)</sup>」という考え方がこれまでの主流であった。このことは、展示とも深く関係しているので、参考になる事例として国立アメリカ歴史博物館の展示プロセスの変化を紹介したい。

同館は、1981～82年を境として「モノの変化から人を中心とした展示へ」と移行している。1988年のアメリカ視察の時には、「日系アメリカ人とアメリカ合衆国憲法」と「アフリカ系アメリカ人の移住」という社会史系のテーマ展示を見学できた。このような抽象的テーマをわかりやすくするために映像やジオラマによる二次資料が展示の中でうまく利用されていた。

つまり、調査・研究の対象物は、コレクション展示からテーマ展示へと展示形態が変わったことと平行して、標本資料と同時に二次的資料を含む情報収集へと拡大している。まさに、フィールドワークの大切さが痛感させられたのである。

### b. 市民活動への援助

次に、博物館の調査活動における市民参加型や、市民による自主的調査への援助などについては、平塚市博物館での活動報告がなされている。<sup>14)</sup> 本論でもさきに報告しているのでここでは生涯学習の時代にあってもっとも重要な課題のひとつであることを指摘するにとどめておく。

### c. 施設間のネットワーク

施設間のネットワークは、事業連携によるネットワークと情報交流によるネットワークに大きく分けられる。また、このネットワークを博物館の実務的な面から考えると、組織



的ネットワークと人的ネットワークに分けられる。図書館などは組織的ネットワークが整備されており、博物館は、どちらかというとな人的ネットワークに頼る傾向がある。

いずれにせよ、研究部門のネットワークについては、まず身近な行政内の協力関係を組織的にするためにも、行政内部のセクト主義を克服することが必要である。そしてこれらのネットワークには、その場限りの関係を越えた大きなルールあるいはひとつの目標みたいなものの設定が大切であるように思われる。このことは、あとでのべるセンター構想のもつひとつの要因でもあることを示唆しておきたい。

## ② 事業部門における三つのサービス

博物館の基本的な事業は三つのフィールドにまたがる調査・研究であり、そこから生産された情報が行政サービスとなることをのべた。

次に、この情報を流通・加工して市民に供給する考え方が必要である。これらについてのこれまでの考え方は、博物館側からの事業として展示・教育普及という機能別にとらえていた。これに対し、本論では、学習意欲の発展段階への対応の視点から動的に分類することが有効であると考え、体育施設で一般化しているエリア・サービス、プログラム・サービス、およびクラブ・サービスという分類を試みた。<sup>15</sup>

### a. エリア・サービス

エリア・サービスとは、入館者に対し、博物館資料をはじめとする初期の学習情報を保有する空間の提供と理解したい。一般的には、展示室が有料で、図書室や体験学習室が無料の場合が多いと思う。それ以外は管理部門となる。ここで留意したいのは、エリア・サービスの理念としてできるだけ博物館施設内の空間が利用できるよう工夫すること。そして直接的に利用できない場合も、研究者の利用している様子や職員の作業風景など間接的に見学できるように配慮することである。

もう一点、議論の対象となるかもしれないが、基本的なエリア・サービスは無料と有料とに分断しないことである。つまり現状では、展示室と図書室は分断され、見る行為と調べてみる行為は連続しにくい状況にある。エリア・サービスは、博物館内をできるだけ公開し興味を持ってもらうとともに、博物館とはどんな場所なのかを理解してもらう努力をおこたってはならないのである。まさに、潜在的学習者の動機づけの最初のチャンスがエリア・サービスなのである。

そして、これまで展示室と収蔵庫はかなり様相を異にしていた。しかし、これを収蔵庫そのものできるだけ収蔵展示の形で公開する工夫をしてみれば、先の教育展示と標本展示の問題もある程度解決できるのではないだろうか。そして、その収蔵展示の資料を研究

者が調査している様子もガラス越しにみられるとしたら、その活用の仕方も学習できることになる。

また、博物館の利用は、展示室からスタートすることが一般的であった。しかし、これからの博物館は、親切な導入部分を心がけることも大切であろう。つまり、展示室の前にレファレンスルームをもうけ、そこを媒介にしながら展示室を出入りすることによりリアルタイムで学習形態をつくりだすことも可能となろう。そのためにも図書室の充実が重要な課題である。

#### b. プログラム・サービス

次にプログラム・サービスとは、学習情報の収集・整理・提供・学習相談・学習プログラムの研究・企画・ボランティア研修などを行うサービス部門である。しかし、残念ながらわが国ではアメリカでいうミュージアムティーチャーのような職員制度が確立していないのが現状である。そのため、博物館サービスでプログラム・サービスの遅れは、博物館事業の画一化をもたらし、利用者に魅力のあるサービスを提供できていないもっとも大きな要因でもある。具体的な事例として、上記にある館内のレファレンスルームをはじめとする利用者と直接的に接遇するのはこのセクションの人たちである。

また、博物館は、生涯学習の中にあって社会教育施設という位置づけよりも文化施設としてありたいと思う。仮に子どもたちが、学校教育の一環として博物館を利用する場合においても指導要領にあった内容として評価されるよりも、独自のプログラム・サービスを提供するほうが本来の姿だと思う。博物館は、子どもたちに知識を与えることを考えるよりも、ゲームセンターとは違った意味で楽しい場所づくりに努力すべきであろう。

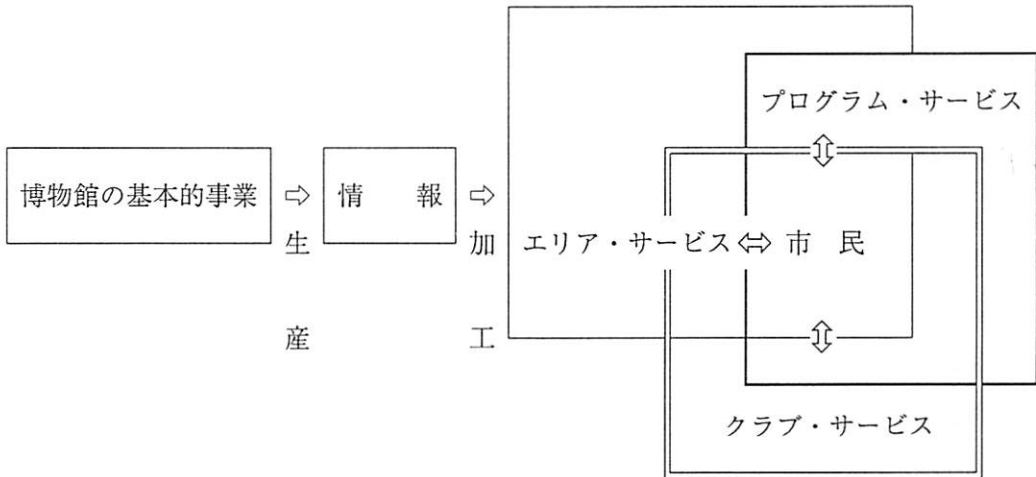
#### c. クラブ・サービス

さて、博物館サービスは、学習機会の提供だけでなく、自主的な学習活動を進めているグループなどに援助を行うこともクラブ・サービスとして位置づけている。クラブ・サービスは、調査・研究の面ばかりでなく、ボランティア活動、友の会活動とも関連し、クラブとしての学習成長とともに潜在的なサービスの担い手としての重要性を含んでいる。

このことに関連して、以前の博物館は、高校の郷土史クラブに代表されるような、市民グループとの交流があった。つまり、クラブ・サービスに類する活動は意識しないまでも自然な形で行われていた。しかし、最近はどうも施設の管理的面が市民サービスよりも優先するような印象を受けないでもない。ここにきて、杉原文夫氏の指摘にある「博物館における公共奉仕」<sup>49</sup>の大切さを感じさせられる。

このような面で三つのサービスを行う事業部門は研究部門の生産した情報を大衆化する

重要なセクションであり、それなりの人材も必要となる。理想をいえば、アメリカの博物館にみられるミュージアムティーチャーをはじめ、デザイナー、資料保存担当技師、コンピューター担当技師、司書などがあげられる。



事業部門におけるサービスモデル

### ③ 総務部門による三つのマネージメント

博物館論は、ほとんどが学術的分野から論じられることが多かったし、社会教育施設論でもあったわけである。ところが最近の生涯学習時代にあっては、カルチャーセンターに代表されるように企業の文化事業を無視して施設論は語れない状況にある。行政と民間との連携があって初めて生涯学習が達成できるのである。このことは博物館の運営も管理的な静的な運営から動的な運営への転換の必要性をも意味していよう。

#### a. 友の会運営への援助

ここで最も大切に思われるのは、友の会運営への援助である。本来、友の会運営は独立した組織としてあるべきで博物館職員が事務局を兼務するのは好ましくない。ここで援助としたのは、この理由からである。そして、友の会活動は、博物館を支援する組織としてばかりでなく、経営的側面を博物館に付加することが求められている。そのために友の会は、財団法人などの経営形態をとり、博物館本体が提供しにくいサービスを担当する重要組織と位置づけられよう。

友の会活動の具体例としては、博物館のサービス事業への援助はもとより、ショップの経営、特別展の共同開催など多方面にわたる。そして、友の会活動は、ボランティア活動

に支えられるわけであるから、多少不安定な組織体としての弱点を持っている。これらをカバーするのが博物館側のひとつのマネジメントである。

これからのボランティア活動は、博物館の中であって職員と市民との相互のふれあいを通じた相互学習の機能をもっている。したがって、人々はボランティア活動に参加することで自らの知的、精神的世界を広げ、生きがい意識を高めることも期待できる。この生涯学習としてのボランティア活動の一層の拡充をはかるために、それをごく日常的で楽しい活動としてとらえることが大切であろう。そして、今後の博物館運営は事業課における三つのサービスの実施ひとつとっても、このボランティアの参画なくして成り立たないと思われる。

#### b. 企業との連携

次に企業との連携については、まず考えられるのは、情報におけるネットワークであり、企業による広報出版物の提供を受け、図書資料として公開するサービスである。地方都市の博物館による出版物には限界があるが、企業の出版物にも学術的にすばらしいものが数多くあり、これを補充するのに十分な情報を持っている。

そして、事業におけるネットワークづくりについては、友の会のところでのべたが、特別展の共同開催が考えられる。大都市圏には、企業博物館が多くあるが、地方都市に設置するにはリスクが多きすぎるためほとんどみられないのが現状である。しかし、企業はイメージアップとともに地域貢献も含めた形で文化的な面においても地方に進出したがっている。現実的な行政施策として、企業誘致をお願いする前に、企業の文化事業誘致を考えてみるのはどうであろうか。それを企業癒着と考えるか、市民サービスと考えるかによってこれからの文化事業の方向性がみえてくるような気がする。

#### c. 市場調査と広報活動

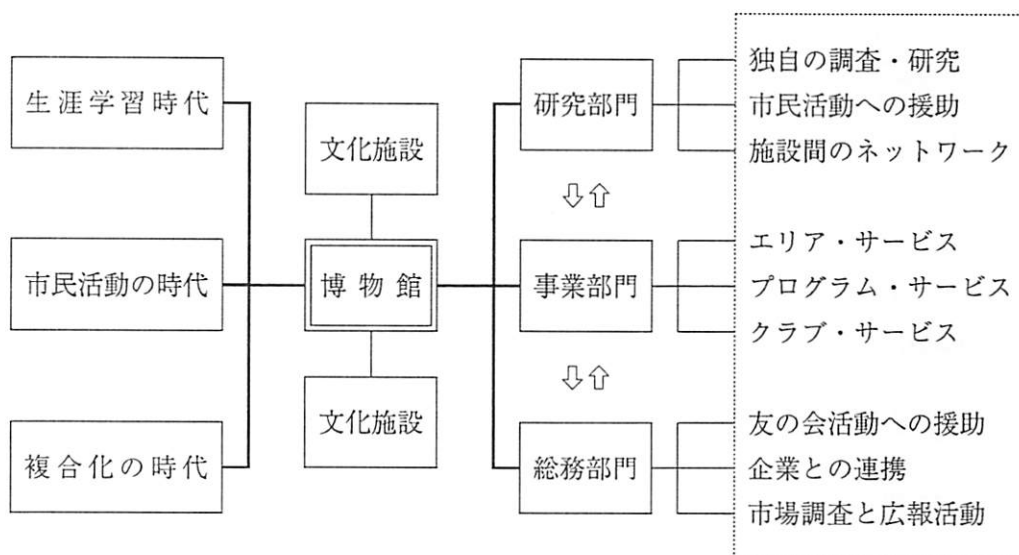
さて、最後になってしまったが、市民が何を求めているか、何をしがっているのかという博物館にとっての市場調査の必要性である。つまり、博物館事業が学芸員主導で行われることが多いためか、どうも (seeds  $\gg$  needs) というアンバランスな運営に対する反省からでもある。博物館にとってもっとも大切な調査・研究の方針とともに、市場調査から得た情報をもとにしたサービス方針の設定も重要な会議のテーマであろう。

これに関連して、あるスーパーの店長さんに店舗のリニューアルについて質問したところ「大都市圏の百貨店は夢を売ることができるが、地方にあってはお客様の不満を少しでも解消することが一番のポイントである」という答えが印象的だったことを覚えている。博物館は、市場調査ばかりでなく広報活動の面でもおくれをとっている。外国での博物館

に関する論文は、この広報の分野についてのものが多いと聞いている。最近、川崎市市民ミュージアムの紀要に広報活動についての論文が掲載されていた。<sup>47)</sup> これからは、このような分野のマネジメントが博物館運営に大きな影響を与えるようになってきていることだけは間違いのないようである。

以上、これからの博物館の運営について、学芸部門における三つのフィールド、事業部門における三つのサービス、総務部門における三つのマネジメントを通して考えてみた。この三つのセクションは、互いに関連しながら重複して博物館が機能していくことはいくまでもない。そして理想とするのは、この重なりあう部分が大きくなり、そこに市民がいろいろな形で参画していることが、まさに生涯学習時代の博物館であるといえよう。

そして、このような三つのセクション制は、より良い協調は、高いレベルでの専門性があってはじめて実現することを前提としている。これこそ高度教養社会・高度情報社会にむけての市民サービスを具現化するための共通認識ではないだろうか。



博物館の運営モデル

#### ④ 仮称ケプロンセンター構想

これまでのべてきたのはあくまでも意識改革的な面が強い。しかし、博物館で働く人たちが、そのような意識をもってはじめてリニューアルにむけて形としてあらわれてくるものであろう。

しかし、これだけではまだ魅力のある場所とはなりえない。つまり、都道府県にみる文化施設の規模と情報力との差に近づくためにも関連施設の複合化を提案するのである。複合施設の魅力は、その規模の大きさにもある。単独館で味わうことができなかったボリューム感が、その場所にひきよせる吸引力をもつことも考えられる。

このことは逆に、複合する場合の中味の問題が重要であることも意味している。つまり、トータル的なイメージをつくりあげられる複合体が望ましいのである。極端に言えば、中にはいる社会教育施設名よりも、総体の呼称で利用されるような考え方がこれからの文化施設のあり方だと考えるのである。このような考え方でつくられたすばらしいモデルがパリの「ポンピドーセンター」であろう。

以上のように複合施設は、しっかりしたテーマ性をもちえれば、場所（位置）と規模（大きさ）についても市民の要望に近づくのではないだろうか。このことは文化施設として集客力を高めるための大切な要件でもある。

さて仮に、函館において、博物館、図書館、文書館（現段階では未定）、情報公開業務、市史編さん室を複合化してみよう。これらは、情報プラザをコンセプトに明治時代、博物館創立に関与した御雇外国人ケプロンの名をとって仮称「ケプロンセンター」という愛称を採用する。ケプロンセンターは、資料の集中化ばかりでなく専門職員の集中化により市民サービスの向上が期待できるのである。

これまでの市民に対して固いイメージであった各施設の利用がケプロンセンターを介して文化施設のイメージを変えることが期待できる。このような考え方は、都市規模の違いにみる単独館同士の較差を克服するために、文化施設数は少なくなるがひとつの施設規模を優先する地方自治体におけるバランス感覚である。

## <おわりに>

1979年第1回文化行政シンポジウムが開催され、梅棹忠夫氏が「文化行政の目指すもの」と題して講演されている。その中で梅棹氏は「東京に住んでも、地方都市に住んでも、日本国内にいる限り、同じくらいの文化生活を享受できるくらいに文化を提供する。これが地方自治のレベルにおける文化行政の目標だ」<sup>18)</sup>とし、地方においても同一水準の文化的装置の必要性を提言されている。

この梅棹氏の提言は、現在においてその重要性は増すばかりである。地方自治体において、文化施設のこのような考え方は、市民全体のサービスをも意味している。そして文化施設はハードばかりでなく市民へのアクセスの問題、経営的サービスの工夫など大衆化し

た施設を目ざさなければならないのである。このような時代の変化にともない、社会の共通した動きがある。それは、建設省によるインテリジェント・シティ構想や通産省が1990年代の流通ビジョンの提言の中に示したハイマート2000構想、そして文部省による文教施設のインテリジェント化などにみられる情報集積化の波である。

地方自治体においても、生涯学習の時代そして市民活動の時代にあって学習需用は間違いなく「拡」大している。また博物館の世代論でものべたように、各社会教育施設自体が「脱」皮しなければならない時期にきている。そして各社会教育施設を「超」えた文化施設のあり様を複合施設の中に求めたのである。

つまり、地方自治体におけるこれからの文化施設は、各施設の法制化のもとでの行政責任を施行するだけでなく、それを超えた行政サービスを提供する「情報センター」あるいは「地域研究所」に進化することが望まれている。

## <謝 辞>

本論は1990年の北海道立教育研究所主催の研修「社会教育施設経営講座」と職員国内視察研修「百貨店経営にみる複合文化施設の展望」の成果を参考にしている。ここであらためて両研修の関係の方々にお礼をのべたい。また、社会教育関係の文献については、北海道教育大学函館分校保健体育教室の新開谷央助教授と道南青年の家所長白畑耕作氏にお世話になった。元町倶楽部については、村岡武司氏のご教示による。

さて、1991年5月から現在の市史編さん室に異動になるまで10年間、市立函館博物館のお世話になった。その中で、博物館職員として、「夢のある博物館づくり」をするとともに博物館づくりに「夢」をもつことが必要ではないかと考えていた。私の夢とは、釧路市立博物館をこえる博物館づくりである。このような夢を与えてくださった沢四郎館長の存在は心の支えでもあった。そしてこの夢から逃避したくなることが何度もあった。しかし、このような時いつもあたたかくはげましてくれた駒沢大学地理学教室の中村和郎教授・同博物館教室の倉田芳郎教授に紙面をかりて感謝の言葉にかえることにする。そして、まだまだ夢をあきらめていないことを報告してペンを置くことにする。

(函館市史編さん室編集員)

## 〔注〕

- (1) 根本直樹「博物館は特別な場所でいいのか？」ステップアップ16 1990
- (2) 恒松制治「地域振興と生涯学習」社会教育45-7 1990
- (3) 能登路雅子『ディズニーランドという聖地』岩波書店 1990
- (4) アラン・チャーリッグ「大英博物館前古生物学部長アラン・チャーリッグ氏講演の記録」神奈川県立博物館だより21-4 1988
- (5) 上田 篤『博物館からミュージランドへ』学芸出版社 1989
- (6) 諸岡博熊『「MI」変革する博物館第三世代』創元社 1990
- (7) 伊藤寿朗「地域博物館の思考」歴史評論483 1990
- (8) 田辺 悟「地域博物館の要件」民具マンスリー19-5 1986
- (9) 厚木市立中央図書館「民間を含む施設、事業所等との複合施設」社会教育43-8 1988
- (10) 流通産業研究所編『「複合型」ビジネスの発想』ダイヤモンド社 1985
- (11) 日本経済新聞 5月20日の記事による 1990
- (12) 中西元男『価値創造する美的経営』PHP研究所 1989
- (13) 糸魚川淳二「日本の博物館と研究」日本の科学者22-2 1987
- (14) 浜口哲一「博物館の調査活動における市民参加」平塚市博物館年報9 1986
- (15) 宇土正彦他『体育管理学入門』大修館書店 1976
- (16) 杉原文夫「博物館における公共奉仕」博物館研究19-8 1984
- (17) 岩崎ゆう子「市民ミュージアムにおける広報活動」川崎市市民ミュージアム紀要1 1989
- (18) 梅棹忠夫「文化行政の目指すもの」『文化行政のこれまで、これから』総合研究開発機構 1979



### 装幀

- 吹貫玄関。函館で最初に開かれた博物館の入口である。開拓使函館支庁仮博物場は、明治11年6月に竣工して翌年5月25日に開場し、函館仮博物場と呼ばれた。

和洋折衷木造建築で現存する博物館として最も古く北海道指定有形文化財となっている。

- 体裁は、明治23年6月に引継がれてきた合衆国博物館報告書のなかで最も古い1867年ワシントン発行のデザインである。

### 市立函館博物館研究紀要 第2号

1992年3月31日発行

---

編集・発行	市立函館博物館
☎040	北海道函館市青柳町17番1号 TEL 0138-23-5480
印刷所	有限会社 共立印刷
☎040	北海道函館市吉川町6番6号 TEL0138-43-7650

**BULLETIN**  
OF  
**HAKODATE CITY MUSEUM**

No. 2

---

**CONTENTS**

Preface

KAZUHIRO HASEBE : A study of the Baba Collection  
—on the Ethnical Materials “The Baba Collection”  
in the Hakodate City Museum—

NAOKI NEMOTO : A Ideal Museum Meets the Needs of the Times  
—For the Cultural Establishment Based on the Requests  
of the Citizens—

---

HAKODATE :

1992